真剣で私と踊りなさい！～光陰の二人～

tack

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真剣で私と踊りなさい！～光陰の二人～

【Ｎコード】
Ｎ６６４５Ｖ

【作者名】
ｔａｃｋ

【あらすじ】
真剣で私に恋しなさい！の二次創作。オリ主、オリキャラ、オリジナル設定。主人公最強設定。
原作ブレイカーなのであしからず。

武神・川神百代と双璧をなすと言われる伊達隼人
工業地帯に居を構える柳瀬悠獅
この二人を歯車に動き出す物語

いつもの朝

川神市。関東の南にある政令指定都市で人口全国第９位。市の北側に多馬川が流れ東京都との境になっており、東部には東京湾が広がっている。

江戸時代から栄えていた歴史ある街で、武家も多く、馬も多かった事から川に多馬川と名前がついた。
歴史ある街、武家が多いと聞いて良く勘違いされるが、東京との近さからここ数十年で駅前付近を中心に一気に近代化し、若者の街とまで言われるようになった。

駅前は人が多く、駅から離れた多馬川沿いの低地はのどかな田園風景が広がり、東京湾岸に広がる埋立地は大規模な重工業地帯となっている。

その川神市にある武道の総本山・川神院。
そこでは、世界各地から集まった修行僧たちが己を高めるために、朝から稽古に励んでいた。

その一角、他の修行僧と比べ明らかに若い二人の男女がいた。

長い黒髪を舞わせ拳を放つ女・川神百代

銀髪をなびかせ同じように拳を放つ男・伊達隼人

川神の矛と盾と呼ばれる二人である。

＜百代＞
「全く、朝からご苦労だと思わんか。」

＜隼人＞
「・・・」

＜百代＞
「なんで、こんな朝から苦行を私が・・・」

＜隼人＞
「・・・・・」

＜百代＞
「しかも、こんな美少女を拳骨で叩き起こすなど・・・」

＜隼人＞
「・・・・・・・・・」

文句を言いながらの百代と口を開かない隼人。
その異名と同じく正反対な二人だ。

＜百代＞
「おい、聞いてるのか？」

＜隼人＞
「聞いてる」

＜百代＞
「じゃあ、なんで何も言わない」

<隼人>
「ここで何を言っても何も変わらないだろ」

<百代>
「だからと言って、「終わった」へっ？」

<隼人>
「ノルマ終了。先いくぞ」

<百代>
「あっ！　待たないかっ」

ノルマをこなした俺は、まだ終わっていない百代を置いて早々に立ち去る。

<少女>
「あっ、お兄様！　ご飯は食べた？」

この俺のこと、お兄様と呼んでくるのは、川神一子。
百代の妹だ。お兄様と呼ぶが俺の妹ではない。

<隼人>
「おはよう一子。俺は食べたよ」

<一子>
「そう。じゃあ、お姉さまは？」

<隼人>
「知らん」

百代は俺よりも後に鍛錬に来たので食べたかは知らない。

＜隼人＞
「それより、また一子はトレーニングか？」

朝の鍛錬を終えているにもかかわらず未だ体操着の一子は、

＜一子＞
「うん。また、ちょっと走ってくるわ」

＜隼人＞
「えらいな、一子は」

＜一子＞
「まだまだ、強くならなくちゃ。それじゃあ、行ってきま～す。」

そういうと一子は走って行った。
その一子を見送ってから、俺は学校へと向かった。

そして、所変わって、橋（通称変態の橋）の上。

＜男＞
「伊達隼人殿とお見受けする。川神鉄心殿に勝負して頂こうと思ったが、川神百代、又は伊達隼人のどちらかに勝たなければ駄目だと言われた。
なので、手合わせ願おう。」

俺は、どっかの武芸者に絡まれていた。

＜隼人＞
「アンタ、よく俺だってわかったな。」

俺の名前って、そんなに知られてる訳じゃないぞ。
異名はそれなりらしいが。

＜男＞
「それは、鉄心殿に伊達殿の事を知らないと申した所、写真を賜った。」

糞ジジイめ、余計なことを。

＜隼人＞
「じゃあ、悪いけど。後から来る百代の方に挑んでくれ。」

＜男＞
「なっ！　それはどういうっ」

＜隼人＞
「どうもこうもない。そっちに挑め。俺はめんどい」

そういうと武芸者の顔がみるみる赤くなっていく。

＜男＞
「貴様！　私を侮辱しているのか！　ふざけるな！」

いや、別にいつもこうなんですけど。

武芸者は、今にも飛び掛ってきそうな感じだ。
さて、どうするか。

＜少年＞
「はいはい。ちょっと、すいません。落ち着いてくださいよ。」

そんな事を考えていると、横から、一人の男。

＜少年＞
「兄さん。もうちょっと、真面目に相手してあげなよ。」

そこに来たのは、百代の舎弟・直江大和。頭が回り、仲間内からは軍師と呼ばれている。

＜百代＞
「そうだぞ。弟の言う通りだ。たまには、お前が相手するといい。」

大和の後ろには、百代を含めた通称・風間ファミリーと呼ばれる、学園では、有名なグループがいた。

＜隼人＞
「とか言いつつも、俺が相手するとお前うるさいだろ」

＜百代＞
「まぁいい、私がいこう。」

そう言って、百代は武芸者に向かっていった。

五分後。

＜百代＞
「物足りない。」

武芸者？　瞬殺。　殺してないけど。

＜隼人＞
「そうか。」

＜百代＞
「ああ～。物足りない。」

そこで、こっちを見るな。
そう思っていると、いきなり

＜百代＞
「川神流　無双正拳突き～」

奥義使ってきました。

＜隼人＞
「ばかっ！　川神流防御術　袖流し」

奥義使われたらこっちも使うしかない。
しばらく攻防が続くが終わらない。

＜隼人＞
「いつまで、続けるんだ？」

＜百代＞

「お前に当てるまで」

こいつは俺を殺す気か！

＜隼人＞

「川神流捕縛術　蜘蛛の巣　派生　蜘蛛糸絡め」

とりあえず、動きを封じる。

＜百代＞

「全く、いつも思うだが、お前は人を縛るのが好きだな。」

＜隼人＞

「縛ってはいない。絡め捕ってるんだ。」

動けない百代を放置して、ファミリーの所に行く。

＜隼人＞

「よう」

＜大和＞

「おつかれ、兄さん。」

俺を労う大和。

＜男１＞

「モモ先輩を動けなくするとか凄すぎだろ。」

この男は、島津岳斗。筋肉むきむきの暑苦しい男。パワー担当だ。

＜男２＞
「ほんと、最強を封じるとかどんなチートだよってね」
こいつは、師岡卓也。色白のもやしっ子。機械系に強い。通称モロ
＜女１＞
「そして、モモ先輩は、蜘蛛に食べられる蝶のように隼人に食べられるのでした。」
この人聞きの悪いのは、榊原小雪。色白で電波っ子。通称ユキ
＜女２＞
「はっ！　それだ。隼人先輩。いえ、師匠。私にその技を！　そして、それを使って、大和を！」
これは、椎名京。無口な読書家。というよりファミリー以外眼中に無い子。大和ＬＯＶＥ
＜大和＞
「兄さん。それ無しね！　マジで！」
これに、一子ともう一人を加えて、風間ファミリー。
＜岳斗＞
「でも、実際、それが使えたら何でもやり放題じゃねぇか。」
＜隼人＞
「まぁな。」
岳斗の言葉はその通り。後の事を考えなければだが。

＜岳斗＞
「じゃあ、今のモモ先輩にはなんでもし放題！」

＜隼人＞
「まぁ、こんな感じだな。」

そう言って、俺は百代のあごをなでてやる。

＜百代＞
「や、やめろ。ち、力が・・・」

＜ユキ＞
「あっ、僕も僕も。」

百代は抵抗するも蜘蛛の糸のせいで動けない。ユキもそれに便乗する。

＜岳斗＞
「じゃあ、俺様も」

＜モロ＞
「あっ、岳斗！」

モロの静止を聞かづに岳斗が百代に触ろうとする。しかも、胸に。
そして、触れる瞬間に蜘蛛の糸を解く。

＜岳斗＞
「あれっ？」

岳斗の手は、空を切った。

＜隼人＞

「じゃあな、岳斗。」

そう言った瞬間に、岳斗は飛んだ

いつもの朝（後書き）

技紹介

川神流防御術　袖流し
相手の攻撃をいなして、受け流す技。物理攻撃限定。

川神流捕縛術　蜘蛛の巣
足から気を流して、それを蜘蛛の巣ようにはり、相手を絡めとる。

川神流捕縛術　蜘蛛糸絡め
蜘蛛の巣で絡めとった相手を更に気で作った糸で身動きとれないようにする。

川神学園

私立川神学園。

川神院総代・川神鉄心が経営する学園である。

ここには、変わり者から名家、果てには財閥の御曹司までが通う学校である。

＜女子生徒１＞
「あっ、伊達先輩よっ！」

＜女子生徒２＞
「モモ先輩も一緒よっ！」

校門付近に近づけば近づくほど、聞こえてくる黄色い声。

＜モロ＞
「相変わらずの人気だよね。」

＜岳斗＞
「全くだな。この俺様には、誰も来ないのに。」

＜京＞
「まぁ、岳斗がモテないのは今に始まった事じゃないけどね。」

＜岳斗＞
「なんだと！　お前だってフラレまくりだろ、京！」

＜京＞
「私は岳斗と違って一途だから。ねっ、大和。」
＜大和＞
「そういって、こっちを見るな。」
いつもの会話が繰り広げられる。
百代？　校門入ろうとした時に、女子生徒抱き上げてどっか行った。
＜男＞
「相変わらずだなぁ、お前たちは」
ファミリー以外の人間から声をかけられる。
＜大和＞
「あっ、川口先生。おはようございます。」
＜モロ・岳斗＞
「「おはようございます。」」
大和の挨拶に続いて、モロと岳斗が挨拶する。
＜川口先生＞
「おう！　おいっ、椎名と榊原はともかく、伊達。一応、担任なんだから挨拶ぐらいしろ。」
＜隼人＞
「どうも。」
＜岳斗＞

「やーい、言われてやんの。」

＜隼人＞
「ほぉ～。　いい度胸だな、岳斗。」

＜岳斗＞
「あ、いや、その」

＜ユキ＞
「あはは～、岳斗、弱～。ケタケタケタ」

少し凄んだだけでビビる岳斗とそれを笑うユキであった。

＜川口先生＞
「にしても、風間はともかく、川神姉妹はどうした？」

＜大和＞
「姉さんはいつもの、ワン子は・・・」

＜一子＞
「みんな～、おはよう～」

＜大和＞
「この通りです。」

＜川口先生＞
「なるほど」

一子が合流する。

＜隼人＞
「それじゃ、先生。また後で」

＜隼人＞
「んじゃ、俺行くな」

学年の違うメンバーと昇降口で別れる。

大抵のメンバーは、２年Ｆ組にいるが、俺と百代は学年が違うため一緒ではない。
それでも、百代と俺が一緒なのには、何か感じさせられるが・・・

＜百代＞
「遅かったな。」

教室に入った瞬間、百代が目の前に現れる。

＜隼人＞
「お前が、一人で先行っただけだろ。」

＜百代＞
「なんだ、妬いたか？」

＜隼人＞

「アホ」

百代の話を流しながら、席に向かう。
ちなみに、俺は、窓際、後から二番目という最高の位置に陣取っている。
まぁ、俺の後に百代がいる事を除けばの話だが。

＜百代＞
「おい、こんな美少女に対してアホはないだろ。なっ、弓子」

文句を言いながら、隣の矢場弓子に振る百代。

＜弓子＞
「えっ、急になに？　あっ、ごほん。　急になんで候。」

あっ、素が出た。

＜百代＞
「いや、隼人が私をアホと言うんだ。どう思う？」

＜弓子＞
「それは・・・、ねぇ？」

百代の問いに苦笑いを浮かべる弓子。
本人の前じゃ答えにくいだろうが、素が出てるぞ。

＜隼人＞
「アホじゃない奴は、そんな毎月毎月借金しないだと」

＜百代＞

「なっ」

＜弓子＞
「まぁ、確かにその通りで候。」

百代は言い返せず、弓子は借金を取り立てに入った。

これでしばらくは静かだ。

＜川口先生＞
「おら、お前ら、席に着きやがれ。」

我らが担任・川口恭平の登場で話は打ち切られたが。

＜川口先生＞
「出席とるぞぉ～」

＜川口先生＞
「川神・・・伊達・・・矢場・・・」

一人一人、名前を読み上げる。

＜川口先生＞
「あ～、宮崎はまだ帰ってきてないのか」

＜男子＞
「先生。宮崎君、生きてるんですか～」

＜女子＞
「三週間音沙汰なしですよ～」

特に注目することもなくホームルームが終わる。

川神学園（後書き）

キャラ紹介
川口恭平
隼人と百代のクラス３－Ｆの担任。
イケメンで、兄貴肌のため生徒の面倒見がいい。
学園の男性教師人気Ｎｏ．１
昔、相当ヤンチャだったらしく、彼の残した伝説が多々あるらしい。

学園生活

あれからしばらくして昼休み。

＜百代＞
「隼人。　昼はどうするんだ？」

＜隼人＞
「・・・・」

昼休みに突入した途端、百代が声をかけてくるが、聞き流す俺。
こういう時は、絶対なにかある。
それを悟った弓子は、早々とどこかに行った。

＜百代＞
「おい、返事をしろ。隼人。」

＜隼人＞
「・・・・・・」

無視無視

＜百代＞
「いい加減にしないと、私とお前の関係を言いふらすぞ。」

変なことを言い出した。

＜隼人＞
「ちなみに聞くが、俺とお前の関係とはどういうものだ？」

＜百代＞
「えっ、それはもちろん。私とお前が一つ屋根の下で・・」

＜隼人＞
「それを言ったら、一子や爺もだな」

＜百代＞
「それはそうだが、お前のファンが聞いたらどうなるかな？」

＜隼人＞
「知ったことか」

冷たく言い放つと、

＜百代＞
「あ～、もういいだろ。頼むから。弁当を分けてくれ～。」

なんて言ってきた。
ちなみに、別に俺は弁当を二つ持ってたり、備蓄している訳じゃない。

つまり、

＜隼人＞
「俺の弁当を奪いに来たか。」

＜百代＞
「いいだろ。育ち盛りの美少女がお腹空かしているんだ。」

＜隼人＞
「これ以上、どこを成長させるつもりだ。」

＜百代＞
「もちろん、胸を」

＜隼人＞
「いや、そこでそこを言うなよ。周りの目を気にしろ。」

こいつ、これ以上でかくしてどうする気だ。

＜隼人＞
「それに、俺から貰わなくてもファンから貰えるだろ、お前。」

＜百代＞
「それは、お前もじゃないか、隼人。むしろ、私はいつも受け取ってもらえない女子達にチャンスを与えているんじゃないか！」

確かに受け取った事はない。いや、一度あったが。
その時、いきなり百代が不機嫌になったのを覚えている。

＜隼人＞
「そうは言っても『は～いエブリバディー。今日も始まりました、ＬＯＶＥかわかみ、パーソナルティは二年Ｓ組のハゲこと井上準と・・・ここでもう一人のパーソナルティがいるんだが・・・・モモ先輩、早く来てくださいよ！』だとよ。」

＜百代＞
「ちっ」

百代は、舌打ちして出て行った。

＜百代＞
『遅れた。人生、喧嘩上等、諸行無常。三年の川神百代だ。』

＜準＞
『さっそくですが、お便りです。モモ先輩に質問です。好きな娘が出来ました。どうすればいいでしょう？』

＜百代＞
『私が味見してやろう。連れてくるといい。』

＜準＞
『ちなみに、本気で言ってますからね。』

まぁ、百代だからな。いつもの事だけどな。

＜準＞
『モモ先輩にお便りです。モモ先輩、好きです。付き合ってください。』

＜百代＞
『私と付き合いたかったら、三年の伊達隼人を倒すことだ。』

はぁ？　あいつ、何言ってやがる。

＜百代＞
『あっ、ちなみ、隼人ファンの諸君。今日の昼は、隼人の弁当は私が食べる。ラジオが終わって、最初に来た奴には隼人に弁当を食べさせる権利をやる。』

＜隼人＞
「ばっ、何言ってやがる。」
＜百代＞
『じゃ、曲流すぞ～』
＜準＞
『ちょっ、モモ先輩。勝手に『うるさい。バキッ！』・・・・・・』
あ～、逃げよ。

所変わって、二年Ｆ組
＜大和＞
「たいへんだな。兄さん。」
＜隼人＞
「だったら、あいつを何とかしやがれ。」
逃げ込む先は、ここか屋上ぐらいしかない。
＜大和＞
「うちのクラスの女子も、狙ってるからね。」

＜隼人＞

「まぁいい。　川神流隠遁術　空蝉」

奥義使って隠れました。

学園生活（後書き）

技紹介

川神流隠遁術　空蝉

自分の気配や姿を相手に捕らえられないようにする。

効果時間は相手によって変わる。

放課後

あれからしばらくして放課後。

２－Ｆに逃げ込んで、百代から逃げて、弁当を死守。
それで終わると思ったら、机の上に弁当が山積み。
百代と弓子、時々、一子を呼んで全部食べた。
正直、今日は何も食べたくない。

＜弓子＞
「ご苦労で候。お茶でも飲むがいいで候。」

弓子がお茶を差し出す。

少しだけ安らぐ。

＜百代＞
「おっ、なんだ弓。隼人を落としにでもかかったか？」

＜弓子＞
「えっ！　何のこと？」

百代に言われて、動揺する弓子。
この子、ちょくちょく素が出るな。

＜百代＞
「いやいや。二人でお茶を飲んで、いい雰囲気だったからな。」

＜弓子＞

「いい加減な事を言わないでほしい候。」

＜百代＞
「私としては、なんでもいいがな。」

この二人って、結構仲良いよな。

＜男子＞
「おい、外で今から決闘だってよ。」

え～と、確かアイツは・・・・・なんだっけ？
まぁいい。クラスの男子の言葉に反応して、皆が決闘を見に行く。

＜百代＞
「おい、隼人。行くぞ。」

俺は、百代に首根っこ掴んで連行された。

そして校庭。

＜一子＞
「あっ、お姉さま。お兄様。」

＜百代＞
「おー。ワン子。かわいい妹よ。」

<隼人>
「よう」

ワン子含めた風間ファミリーがいた。

<男>
「よう。モモ先輩、隼人先輩。」

そこには、朝にはいなかったファミリーのリーダーの姿もあった。

<隼人>
「ようキャップ。いつから来てたんだ？」

<男>
「ついさっきだぜ！　なんか面白そうな事が起きそうな予感がしたから来てみたぜ。」

コイツはキャップこと風間翔一。大和、一子と一緒に風間ファミリーを立ち上げた人物だ。

そして、コイツの感が当たる当たる。とてつもない強運の持ち主。

<百代>
「ところで、決闘する奴は誰なんだ？」

<大和>
「岳斗だよ。姉さん。」

<隼人>
「ほぉ、岳斗か。誰が相手なんだ。」

<モロ>
「なんか、２－Ｓの仲村っていう人みたいだよ。」

<隼人>
「なんだ。じゃあ、ファミリー集合か。」

<ユキ>
「そうだよ～。という訳で、とりゃっ！」

ユキは返答しながら、俺の肩に乗ってきた。
いわゆる肩車というヤツだ。

<一子>
「あ～、ずるい！　お兄様、私も私も。」

<京>
「あっ、ワン子」

一子も京の制止を聞かずに肩に乗ろうとする。

<岳斗>
「お前ら、いい加減、俺様の活躍に集中しろ！」

そろそろ爺が口を挟んできそうだし、岳斗の言葉を合図に静かにした。

<爺>
「それでは、これより決闘の儀を始める。」

爺の言葉で、周りから歓声があがる。

＜爺＞
「西方　２－Ｆ　島津岳斗」

＜岳斗＞
「おうよ！」

＜爺＞
「東方　２－Ｓ　仲村透」

＜仲村＞
「はい！」

＜爺＞
「ルールは、素手のみ。どちらが戦闘不能、負けを認めたらそこで終了じゃ。
それでは、はじめっ！」

＜岳斗＞
「おうりゃあああああああああああ」

岳斗が開始と同時に力任せのラリアット。

＜仲村＞
「うわっと」

仲村はそれを避ける。そして、

＜仲村＞

「せいっ」
蹴りを繰り出す。
その蹴りは、サッカー部に所属している為、かなりのキレだ。
＜岳斗＞
「ぐっ」
それを岳斗は、モロに食らう。
しかし、
＜岳斗＞
「ヘッ、捕まえたぜ！」
密着して仲村を掴んで、ホールド。
＜岳斗＞
「それじゃあ、いつまで耐えられるか勝負だ！　１っ！」
岳斗渾身のヘッドバット。
＜仲村＞
「ぎゃっ」
それを食らった仲村は、
＜岳斗＞
「一発で終わりかよ。」
＜爺＞

「勝者　２－Ｆ　島津岳斗」

＜岳斗＞
「フン」

勝利者宣言を受けて、自慢の筋肉を見せ付けるように、ポーズをとる岳斗。

＜隼人＞
「帰るか。」

＜百代＞
「そうだな。」

＜京＞
「賛成。」

＜ユキ＞
「賛成賛成～」

＜隼人＞
「ユキはいつまで乗ってるつもりだ！」

＜ユキ＞
「あはははは～」

＜隼人＞
「クッキー。コーヒー。」
＜百代＞
「私は、コーラだ。」

俺と百代は、溜まり場である秘密基地にいた。
秘密基地と言っても子供が作るようなモノではない。
廃ビルの最上階を許可を取って使っているのだ。

クッキーとは、九鬼製のご奉仕ロボである。なぜそんなものがあるかは単純。
貰ったそれだけだ。

＜クッキー＞
「はいはい。ちょっと待ってね。」

ちなみにかなり高性能で喋るだけでなく変形もする。

＜百代＞
「それにしても、暇だな。隼人、ここは一戦私とどうだ？」
＜隼人＞
「断る」

コイツ、さっきの決闘見てバトルマニアの血が騒ぎ出しやがったな。
＜百代＞

「じゃあ、せいっ」

ソファーでくつろいでいる俺を押し倒して馬乗りになりやがった。

＜百代＞

「マウントをとれば、いくらお前とはいえ一方的だろ。」

まぁ、単純なパワーでは、コイツの方が上だしな。

＜京＞

「モモ先輩たち、いる～？」

京が来た。ナイス、京！

＜京＞

「ねえ、モモ先輩。五時間ぐらいでいいかな。」

いきなりなに言ってやがる。

＜百代＞

「確かに、それなら数回はできるだろうしな。」

お前もなに言ってやがる。

＜京＞

「隼人先輩。」

＜隼人＞

「なんだ？」

<京>
「チェリー卒業おめ。」

ｇｏｏｄの札を手になんてこと言いやがる。

<京>
「それじゃあ、」

京が帰ろうとするが、

<京>
「あれ、動けない。」

<百代>
「私もだ。」

<隼人>
「”蜘蛛の巣”　俺が何もせずにおとなしくしてると思ったか？」

<百代・京>
「「ヒッ」」

<隼人>
「じゃあ、お仕置きだ。」

<百代・京>
「「まっ」」

<隼人>
「川神流幻惑術　朧月」

＜大和＞
「ねえ、兄さん。この状況は？」
＜隼人＞
「お仕置き中だ。」
＜百代＞
「くっ、来るな！　来るな！来るなあああああ。うわあああああああああああ」
＜京＞
「大和！　待って！　大和！　大和！　やまとおおおおおおおおおおおおおおお」

放課後（後書き）

技紹介

川神流幻惑術　朧月

相手にとって最悪の幻覚を見せ付ける。

川神の闇

―ｓｉｄｅ　？？？―

親不孝通り。
川神市の中で、治安の悪い地域として知られる場所だ。
今は夜。つまり、

＜男＞
「おい、ふざけんなよ。糞野郎。」

こういうバカもいっぱいいるって事だ。

＜男＞
「さっきから何笑ってんだよ！　テメェ！」

ああ、うるさい。
こういう奴は、さっさと寝かしつけてやるのが一番なんだけど。

＜男＞
「ていうかよぉ。お前、よく見たら、板垣家の味噌っかすじゃねぇか」

あっ、コイツ。俺の事知ってんだ。

＜男＞
「お前の兄弟に普段世話になってっからな。お返ししねぇとな」

指を鳴らしながら、近づいてくる男。

ああ、やる気満々なのね。

＜男＞
「んじゃ、とりあえず、死んでくれ。」

殴りかかってくる。
まぁ、素直に食らってやる気はない。

＜男＞
「おっ、避けたか。いいねぇ。いつまで、避けられるかな？」

調子に乗ってるか。
まぁいいけど。

＜男＞
「それにしても、気持ちワリィ顔で笑ってんじゃねぇよ！」

ひどいなぁ。この顔が一番楽なのに。

＜男＞
「おっと、そっちは、行き止まりだぜ～」

避けてる間に、人のいない脇道に入ってしまった。
その上、行き止まり。

＜？？？＞
「ここまでか。」

俺は、初めて口を開いた。

＜男＞
「なんだ、もう諦めたか。じゃあ、痛い目見てもらうぜ」
じゃあ、終わらせよう。
こんなチンケな事。
―ｓｉｄｅ　ｏｕｔ―

―ｓｉｄｅ　？？？―
＜？？？（女）＞
「全く、あの子は何やってんだか。」
私は、一人の子を探して歩いていた。
＜男＞
「ねぇねぇ。お姉さん。俺と遊ばない？」
＜？？？（女）＞
「黙れ、豚。」
こんな奴に絡まれるのも、あの子の性だ。
＜男＞
「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああ

あああああああああ」

そんな事を考えていると、突然、悲鳴が聞こえた。

＜？？？（女）＞

「あっちか」

悲鳴のした方へ向かっていく。

そこには、一人の男が四肢を砕かれ、泡を吹き、血を流しながら倒れていた。

＜？？？（女）＞

「全く。」

この辺にいると思うのだが、あの子は隠れるのがとてもうまい。

＜男＞

「亜巳姉さん。どうしたの？」

しかし、考えとは裏腹に目的の人物はすぐに現れた。

＜亜巳＞

「お前を探しにきた」

目的の人物は、いつも通りの柔和な笑みを浮かべていた。

＜男＞

「なんかあったっけ？」

そして、首を傾げている。

＜亜巳＞
「お前の稼ぎの方がどんなモンか聞きに来ただけだよ」

＜男＞
「俺の方は、今のヤツがもう少しすれば出来上がるから。
しばらくすれば、まとまった金が入るよ。」

＜亜巳＞
「お前も相変わらずだね。」

＜男＞
「じゃあ、俺行くね。
これから、また仕込みだから。」

＜亜巳＞
「ああ、がんばりな。悠獅。」

こうして、私、板垣亜巳は柳瀬悠獅と別れた。

新メンバー1

＜キャップ＞
「という訳で、クリスを仲間にしようと思う。」
金曜集会でキャップがいきなり言い出した。
キャップが言うに、２－Ｆの転校生であるクリスティアーネ・フリードリヒを風間ファミリーの加えようと言うのだ。
そして、ファミリー内での意見は、
＜キャップ＞
「え～と、賛成４　反対２　無効票２　か。」
ちなみに、賛成は、キャップ、大和、一子、百代、岳斗。
反対は、京、モロ。
無効票、俺、ユキ。
＜隼人＞
「ちなみに、賛成陣の意見は。」
＜キャップ＞
「面白くなりそうだ。」
＜大和＞
「別に害はないだろうし。居て楽しかったらいいんじゃないか？」
＜一子＞

「戦える相手が増えるわ。」

＜百代＞
「可愛い子は、全部、私のだ。」

＜岳斗＞
「美人だし」

キャップ、一子、百代、岳斗の順だ。
一子はともかく、百代は相変わらずだ。

＜キャップ＞
「じゃあ、反対派は・・・・言わんでも分かるか」

＜京＞
「皆がいればそれでいいよ。他のなんていらない。」

＜モロ＞
「うん。これ以上はもう誰もいらないよ。」

京、モロの順だが、言ってる事は一緒だな。

＜京＞
「それよりも、大和！　害はあるんだな。」

京が大和を指差し言う。

＜隼人＞
「ちなみに、害とはなんだ？」

＜京＞
「大和に近づく雌が増える。」

＜隼人＞
「害があるのは、大和じゃなく京か。」

さすがは京。大和一筋だな。

＜百代＞
「こうまで思われて、幸せものだな。弟よ。」

＜隼人＞
「そこには、同意しよう。」

百代の言葉に同意する俺。

＜岳斗＞
「おいおい。それを言うなら、モモ先輩と隼人先輩も十分幸せだろ。」

＜モロ＞
「そうだね。あれだけ、モテてるんだから十分だね。」

＜大和＞
「というか、姉さんは男に興味がないの？」

岳斗にモロが同意して、大和が問う。

＜隼人＞
「別にそういう訳ではないが、私をトキメかせる男がいないんだ。」

＜ユキ＞
「じゃあ、誰がモモ先輩をトキメかせられるか、勝負だね～。」
ユキの提案に対し、
＜モロ＞
「僕には無理。」
＜岳斗＞
「俺様、連敗中だから。」
＜キャップ＞
「恋に生きるのは、なんか違うぜ。」
＜大和＞
「勝算無し。パス。」
お前ら、これじゃあ、引けないだろ。
＜ユキ＞
「どうするの～。隼人～。」
煽るなユキ。そして、期待に満ちた目で見るな京。
＜隼人＞
「ちっ、仕方ねえ。百代、ちょっと壁に寄りかかれ。」
＜百代＞
「ふむ。こうか？」

言われたとおり、壁に寄りかかる百代。
そこに手を顔の横に叩きつけ、百代が驚いているところに
覆いかぶさり、顎を軽く持ち上げ、視線を合わせて、見つめてから

＜隼人＞
「今から、お前が誰のものかハッキリさせてやる。いいな？」

ささやいて、唇を近づけ、

＜隼人＞
「はい。終わり。」

ギリギリで放す。

＜百代＞
「えっ、うっ　あ。」

百代は顔真っ赤。
何真っ赤になってんだコイツ。

そんな事を考えていると、後ろから服の裾を掴まれた。

＜隼人＞
「ん？　なｎ」

振り返ると、睨む一子、ダークｉｎユキの二人。

どうすりゃいいんだよ？

＜キャップ＞
「という訳で、仲間にならないか？」

キャップがクリスを誘う。

あれから、酷い目にあった。
一子、ユキの機嫌を直し、真っ赤になってショートした百代を復活させ、
他のファミリーに散々イジられ、
ようやく解散した。
したが、なんか百代に変なスイッチが入っちまって、ぎこちないぎこちない。

ようやく、クリスの勧誘までこぎつけた。

＜大和＞
「普段はこうやって、遊んでるんだ。どうだ、仲間にならないか？」

クリスの勧誘は、キャップがメインで、大和がサポート。
残りは野球中。

<岳斗>
「フン。来いよ、京。俺様がバックスクリーンに叩き込んでやる。」

<京>
「じゃあ、行くよ」

ピッチャーは京、バッターは岳斗。それ以外は、適当なところについている。

<京>
「イケメンは打てないボール。」

<岳斗>
「なにっ！」

空振り。

<大和>
「京、真面目にやってやれよ」

<京>
「うむ」

大和の言葉でようやく真面目になった。

カキーン！！

<京>
「あっ」

＜岳斗＞
「ほらみろ。これなら、文句なしでバックスクリーン直撃でホームランだろ！」

岳斗の打った球は勢い良く飛んでいった。

＜百代＞
「甘いな～、岳斗。」

百代の言うとおり。甘い。

＜一子＞
「やあああああ」

＜ユキ＞
「せえええええい」

ユキと一子が疾走する。
そして、

＜一子＞
「ユキ！」

＜ユキ＞
「了解だよ！」

足の速い一子が足場になり、跳躍力の高いユキがジャンプ一番。

＜ユキ＞
「キャーッチ！」

<隼人>
「はい。岳斗アウト。」

<岳斗>
「くそっ。あのコンビはずるいだろ。」

まぁ、確かにあのコンビはファミリーでも最強クラスの組み合わせだ。

<キャップ>
「と、こんな感じなんだ。」

<クリス>
「おもしろそうだな。私も入っていいのか？」

<キャップ>
「ああ。」

どうやら、クリスの加入も決まったようだ。

新メンバー2

＜女＞
「お願いします。なんでもしますから！　仲間に入れてください。」
なぜ、俺たちは、初対面の後輩に頭を下げられてるんだ？

＜キャップ＞
「え～と、黛さんだっけ？　とりあえず、顔を上げてくれ。」
確か、クリスの歓迎会を島津寮でやっていたんだが、
仲間外れにしちゃ悪いから、同じ寮に入った後輩を混ぜたんだよな。
それで、飯食ったらこうなったと。

＜キャップ＞
「黛さん。悪いんだが、そんなんじゃ仲間には入れられないな。」
キャップが言った。
黛さんは、相当ショックのようだが、キャップが続ける。

＜キャップ＞
「そんな風にしないでも、楽しそうだから混ぜてでいいんだぜ。」

＜モロ＞
「キャップ。」
キャップの言葉にモロが感動してる。

＜黛＞

「それでは」

黛さんが深呼吸して、

＜黛＞

「楽しそうだから、混ぜてください！」

言った。

＜キャップ＞

「うん。駄目。」

＜モロ・岳斗・大和＞

「「「おおおおおおおおおおおい」」」

キャップの言葉に、盛大にモロと岳斗、大和が叫ぶ。

あっ、黛さん、気絶した。

＜モロ＞

「アンタは鬼かっ！」

＜キャップ＞

「冗談だよ。冗談。」

あっ、黛さん、復活した。

＜キャップ＞

「いいぜ。じゃあ、まゆっちもこれから仲間だな。」

＜黛＞

「ま、まゆっち？」

＜キャップ＞
「あれ？　あだ名だけど、嫌だった？」

＜黛＞
「いえいえいえ。ありがとうございます。」

これで新メンバーが二人か。

＜一子＞
「それじゃあ、自己紹介をしとこうか。」

＜百代＞
「川神百代。武器は拳一つ。好きな言葉は誠。」

＜一子＞
「川神一子！　武器は薙刀！　勇気の勇の字が好き。」

＜京＞
「椎名京。弓使い。好きな言葉は仁・・・・・女は愛。」

＜ユキ＞
「榊原小雪～。格闘が得意だよ～。好きな言葉は～～楽かなぁ～」

＜クリス＞
「クリスティアーネ・フリードリヒ。武器はレイピア。儀を重んずる。」

＜黛＞

「黛由紀江です。刀を使います。礼を尊びます。」

女子が終わり、

百代が指差し、

＜百代＞

「あのバンダナがキャップ。りーだーだ。」

＜百代＞

「筋肉が岳斗。バカだが面倒見はいい。」

＜百代＞

「根暗そうなのがモロロ。優しくはある。」

＜百代＞

「その隣が、大和。私と隼人の舎弟だ。頭が回る。」

＜百代＞

「で、そこで、ユキとワン子が絡んでるのが、隼人。はっきり言って、天才だ。」

明らかに、おざなりな自己紹介だ。

＜隼人＞

「というか、百代。それは、周りが好き勝手言ってるだけだろ。」

すこしばかりの反論。

＜百代＞

「なにを言う。その年で、川神流の新体系を完成させた男が。」

＜隼人＞
「あれは、俺が戦いやすいように考えただけだ。」

＜百代＞
「その結果、圧勝していた私を軽く捻れる様になったと。」

＜クリス・黛＞
「「えっ！」」

新人二人が驚きの声を上げる。

＜クリス＞
「待ってくれ、モモ先輩。だって、武神とも呼ばれるあなたがか？」

＜黛＞
「そうですよ。武道四天王の一人であるあなたをですか？」

言いたいことは分かるんだが、あまり大げさに言わないでくれないかな。

＜京＞
「ああ、そっか。普通はそうだよね。」

＜大和＞
「兄さん。目立とうとしないから。」

＜ユキ＞
「目立つと大変な事もない癖に～。」

こら。京に大和にユキ、好き勝手いってんじゃない。

＜百代＞
「まぁ。知らなくても無理はない。クリスとまゆっちは隼人を知ったのは最近だろ。
コイツは、面倒くさがりだから。勝負も受けないし。」

＜一子＞
「でも、実際、お姉さまとじいちゃんしかまともに戦えないのよね。
」

いや、それは相性がいいだけだから。

＜百代＞
「爺の必殺技なんか防げるのはコイツだけだし。」

＜隼人＞
「あのなぁ～。単純な殴り合いだったら俺は勝てねえだろ。」

百代と俺で言い合う。

＜大和＞
「まぁ。ともかく、兄さんと姉さんが戦ったら、殴り合いだったら姉さん。実戦だったら兄さんって訳。」

＜隼人＞
「まぁ、どっちにしろ。このファミリー女子の影響力の方が強い。」

なんて言ったら、

＜大和＞
「おい。またれや、男子。」
なんか大和が言い出した。
＜大和＞
「武力で勝てなければ知力で勝たばいいのだ。
勇気を忘れてはいけない。」
＜百代＞
「ほぉ～。」
＜大和＞
「えっ？」
大和の言葉に反応した百代が大和を捕まえた。
＜百代＞
「よく言った。弟よ。」
そして、女子陣の方に連れて行かれた。
－ｓｉｄｅ　ｏｕｔ－
－ｓｉｄｅ　大和－

姉さんに女子陣へ引きずり込まれた。

＜百代＞
「彼が女子に調子を乗らせないだそうだ。」

なっ！　そこまで言ってない。

＜クリス＞
「何だと。」

真っ先クリスが反応しやがった。

＜大和＞
「い、異議あり。その意見は拡大解釈だ。」

＜百代＞
「却下。」

そして、腹部を殴られた。

＜大和＞
「理不尽だ。」

＜百代＞
「残念ながら、ここはお前の得意な法廷ではない。獄中だ。獄中は理不尽で当然。」

＜大和＞
「無法地帯だとっ」

＜京＞
「これはいじらなければ。」

京っ！　貞操の危機！

＜大和＞
「しかし、ピンチには当然仲間が、」

＜キャップ＞
「じゃあな。大和。」

＜岳斗＞
「俺様もプライドを捨てたくはないね。」

＜モロ＞
「さようなら。」

＜百代＞
「残念。いい仲間持ったな。弟よ。」

姉さんが笑顔で言う。
だが、

＜大和＞
「だが、しかし、まだ、最後の切り札が」

＜隼人＞
「俺は、傍観してるぞ。まぁ、気が向いたら助けてやる。」

兄さんのこれは、助けないという意味だ。

<大和>
「神は死んだ。」

――side out―

―side 隼人―
<京>
「じゃあ、大和。ここからは性と暴力の都だよ。」

<一子>
「いい友達を持った事を感謝することね。」

<クリス>
「ああ、全くだ。情けない。」

京、一子、クリスの順で好き勝手いいまくる。

<キャップ>
「ふっ、好き勝手言ってくれるぜ。」

キャップが言う。

<一子>
「じゃあ、ここで、大和争奪の戦争でも始める?」

＜隼人＞
「それもいいかもな。」
＜京・一子・クリス＞
「「「えっ？」」」
俺の一言に、三人が固まる。
＜京＞
「でも、さっきは傍観するって。」
＜一子＞
「うそだよね？　お兄様？」
いや、そのつもりだったんだけど。
＜隼人＞
「あれだけ好き勝手、しかも目の前で調子に乗られると・・・・ね？」
さすがにいい気はしない訳よ。
＜一子＞
「でも、こっちにはお姉様が。」
＜百代＞
「すまん。」
＜一子＞

「えっ？」

＜隼人＞
「悪いが、お前たちは、もう反撃すらできん。」

＜京＞
「まさか！」

＜隼人＞
「”蜘蛛の巣”　戦争だとしても、これで終わり。さて、敗残兵はどうしようか」

わざと、悪い笑みを作って見せる。

＜隼人＞
「岳斗。何がいい？」

＜岳斗＞
「それはもちろん、ふ、むふふふふふ。」

うわ、気持ちワル。

＜クリス＞
「待ってくれ。せめて、他のヤツに。」

女子陣もあれは気持ち悪いみたいだ。

＜隼人＞
「ああっ、それは大丈夫。岳斗も絡まってるから。」

＜岳斗＞
「なんだと！」

岳斗は声を上げて驚く。

＜岳斗＞
「なんで、俺様も捕まってんだよ。」

＜隼人＞
「だって、ねぇ？」

お前、また気持ち悪い事いいそうなんだもん。

＜隼人＞
「でも、まぁ、放してやるか。なっ、ユキ。」

＜ユキ＞
「そうだね～。」

＜百代・一子・京・クリス＞
「「「「「えっ？」」」」」

ユキは俺の後から、俺に肩車する。

＜ユキ＞
「いえ～い。」

＜一子＞
「なんで、ユキが。」

<隼人>
「最初からユキは、俺の後に逃げてきてた。」

<ユキ>
「いえ～い。」ツンツン。

<百代>
「こら、ユキ。突くな。」

<隼人>
「大和も逃げたし。」

<京>
「えっ」

京は、呆然。

<隼人>
「新人に力も見せたし。」

<クリス・黛>
「「あっ」」

<隼人>
「放してやるか。」

そう言って開放する。

こうして、新メンバー二人が加わった。

＜岳斗＞
「なぁ、俺様、いつまでこのままなんだ？」
岳斗は放置しといたけど。

板垣家

－ｓｉｄｅ　亜巳－

川神市にある重工業地帯。治安が悪い事で有名な地域だ。
そこに私達は居を構える。

常に工業地帯ならではの特有の異臭と排気ガスで覆われていて、
不良やチンピラがうろついているが、特に気にもならない。
というよりも、私の兄弟はこういう環境の方が合っていた。

＜亜巳＞
「帰ったよ。」

＜女＞
「おお、今日の貢物はなんだ？」

末っ子・板垣天使がいち早く反応する。

＜亜巳＞
「特上寿司だよ。」

＜男＞
「さすが、女王。貢物もトップクラスか。」

今日の夕飯のメニュー聞いて喜ぶのが次男・板垣竜兵。

＜亜巳＞
「ほら、机の上きれいにしな。」

<竜兵>
「こんなもん、叩き落とせばいいんだよ。」

<女>
「だめだよ〜。今、片付けるから〜」

竜兵を止めようとするのが、次女・板垣辰子。

<亜巳>
「じゃあ、食べようか。」

言うと同時に、天と竜兵が飛びつく。

<亜巳>
「全く。」

それを尻目に、自分の分ともう一人の弟の分を確保する。

<天>
「マグロもらい〜」

<竜兵>
「天、テメェ！　マグロ食いすぎなんだよ！」

<天>
「はっ！　早いモン勝ちなんだよ。」

<竜兵>
「じゃあ、アナゴ貰ってく！」

＜天＞
「テメェ、ウチのアナゴ！」
＜辰子＞
「二人共、やめなよ～。」
騒ぐ二人を止めようと辰がする意味はない。
この子、言い方はのんびりしすぎ。
＜亜巳＞
「やめろ。いい加減うざい！」
＜天・竜兵＞
「「ひっ」」
これで静かになった。
＜天＞
「あれ、亜巳姉。その皿は？」
天が、私の使っている皿のとなりの皿を指す。
＜亜巳＞
「これは、悠獅の分。」
＜竜兵＞
「ああ、なるほど。」
竜兵が納得する。

いつも、私がこうしてるからだろう。

＜天＞
「悠兄、帰ってくるか分かんないだから、それも食おうぜ。」

なんだって・・・・・

－ｓｉｄｅ　ｏｕｔ－

－ｓｉｄｅ　竜兵－

＜天＞
「悠兄、帰ってくるか分かんないだから、それも食おうぜ。」

ああ、バカが一人。

＜亜巳＞
「天。私は、悠獅の分だって言ったよねぇ。」

＜天＞
「ひっ」

キレちまった。
亜巳姉は兄貴に関する事で冗談が通じないって、アイツはなぜ理解しないんだか。

今の内に、寿司食っとくぜ。

＜亜巳＞
「天。これから、自分の飯は自分で用意するかい？」

＜天＞
「ごめん、亜巳姉。それだけは！」

やっぱり、こうなったか。
兄貴は、亜巳姉のお気に入りだからなぁ。

＜辰子＞
「ねえ、亜巳姉～。今日は、お兄ちゃん帰ってくるの～」

そういえば、辰姉も兄貴に懐いている。

兄貴は家に帰ってくると、大抵、亜巳姉と辰姉の相手をさせられている。

＜亜巳＞
「言ってなかったね。今日は、帰るって言ってたよ。」

兄貴は、家の兄弟の中では、一番家にいない。
随分前に、一ヶ月音沙汰なしの時があった。
そんときゃ、亜巳姉も辰姉も心配していた。
でも、しばらくして、大金片手に帰ってきた。
どんな事をしてるかは知ってるが、一番謎の多い人物だ。

＜悠獅＞

「帰った。」

噂をすればなんとやらってな。

－ｓｉｄｅ　ｏｕｔ－

－ｓｉｄｅ　悠獅－

＜悠獅＞
「帰った。」

三日ぶりに家に帰ってきた。

＜辰子＞
「お帰り～。お兄ちゃん。」

辰子が笑顔で返してくれる。
我が妹ながら、よくこの環境でこんな良い子に育ったんだか。

＜竜兵＞
「よう、兄貴。」

＜悠獅＞
「よう。」

竜兵に返しながら、亜巳姉と辰子の間に座る。

＜悠獅＞
「なんで、天は泣きそうな顔してんだ？」

＜亜巳＞
「気にしなくていいよ。」

天の代わりに亜巳姉が答える。

まぁ、いいか。

＜亜巳＞
「はい。悠獅の分。」

＜悠獅＞
「ありがと、亜巳姉さん。」

やっぱり、亜巳姉さんに言っといて良かった。

＜辰子＞
「はい。しょうゆ～」

＜悠獅＞
「辰子もありがとな。」

辰子はホントに良い子に育ったなぁ。

＜辰子＞
「うん？」クンクン

辰子が俺の匂いを嗅ぐ。

＜悠獅＞
「どうした？」

＜辰子＞
「いつもと違う。」

いつもが分からんが、

＜悠獅＞
「新しいヤツが入ったからか？」

それしか、思いつかない。

＜亜巳＞
「また、新しいの見つけたのかい？」

＜悠獅＞
「ああ、才能はある。ただ期待値は低いなぁ。まぁ、それでも、少しは仕込まなきゃいけないんだけど。」

＜亜巳＞
「悠獅は、いつもそれだねぇ。」

＜悠獅＞
「あはは、まぁね。」

こんな感じで、夜が更けていった。

日常

＜隼人＞
「で、なんで俺が呼ばれたんだ？」

今、俺は、岳斗とモロと一緒にファミレスにいる。

＜岳斗＞
「それはだな。俺様の壮大なる計画「ナンパか」最後まで言わせろよ。」

＜モロ＞
「で、いつもと一緒じゃ進歩がないから。先輩呼んだんだよ。」

＜隼人＞
「進歩がないと気づいたのは進歩なのか。」

＜モロ＞
「たぶんね。」

いつもつき合わさせられてるモロに同情する。

＜隼人＞
「しかし、なんで俺なんだ？」

＜モロ＞
「キャップ、今日は、埼玉だって。」

＜岳斗＞

「大和は、ナンパなんか成功しないだとよ。たくっ、俺様のおこぼれを分けてやろうと言うに。」

＜隼人＞
「キャップは相変わらず。大和は、利口だな。」

はぁ、急用だというから来てみれば。

＜隼人＞
「ホント。岳斗は、相変わらずだよ。」

＜岳斗＞
「まぁ、見てろって。今日の俺様は、一味違う。」

＜モロ＞
「それ、いつも言ってるよ。」

＜岳斗＞
「しかも、ウェイトレスが、さっきからこっち見てるだろ。脈アリだろ。」

＜モロ＞
「それは、岳斗を見てるんじゃなくて、先輩を見てるんだよ。」

こいつらは、暇なんだろうな。
そう思いながら、呼び鈴を押す。

＜ウェイトレス＞
「どうかしましたか？」

<隼人>
「コーヒー、おかわり。それと、このケーキを一つ。」

<ウェイトレス>
「かしこまりました。」

ケーキでも食って帰るか。

<岳斗>
「おいおい。先輩なんで、ウェイトレスに何も言わないんだよ。」

<隼人>
「お前と一緒にするな、岳斗。それと、お前のおごりだからな。」

<岳斗>
「なんで！」

<隼人>
「おいおい。急用と言ってナンパの手伝いさせて、なんの謝礼もないのかい、岳斗くん？」

とびきりの笑顔で言ってやる。

<岳斗>
「わ、分かったよ。くそっ。」

<隼人>
「そう言うなよ。太っ腹な所を見せれば、少しは可能性も上がるんじゃないか？」

<岳斗>
「おお！　なるほど。よし、今日は、モロもおごってやる。」
扱いやすい奴め。
モロに向かって、笑ってみせると、
<モロ>
「はは、ありがと。岳斗。」
苦笑いしてやがる。
<ウェイトレス>
「コーヒーとケーキになります。」
おっ、来たか。
<隼人>
「んじゃ、いただきます。」
さっさと食って、帰ろ。

あの後、いろいろ岳斗に吹き込んでから帰ってきた。
ファミレスとかで働いてる子に対して、おごったぐらいでプラスになるとでも思ってる岳斗に合掌。

そんな事を考えながら、自分の部屋へ向かう。
ちなみに、俺の家は、川神院。
とある事情で、子供の頃に引き取られてから、ずっとここで暮らしてる。

＜百代＞
「おい、隼人。どこにいっていた？」

＜隼人＞
「その前に、なぜ、俺の部屋にいる？」

だから、こういう風に百代が入ってきたりしている。

＜百代＞
「暇だった。だから、お前で遊ぼうかと。」

＜隼人＞
「何かしら、趣味でも見つけろ。岳斗みたいナンパの毎日でも困るが。」

＜百代＞
「岳斗は、懲りずにナンパか。」

＜隼人＞
「それに訳も分けらず、呼び出されたから、いろいろ食ってきた。岳斗の金で。」

＜百代＞
「なっ、おごりなら私も呼べよう～。」

<隼人>
「面倒だ。」

<百代>
「くっ、こうなったら憂さ晴らしだ。」

<隼人>
「その前に、ちゃんと隣の部屋に帰れ。」

百代の部屋は、俺の隣。
更に言うなら、百代の隣は一子だ。

<一子>
「お兄様〜。助けて〜。」

今度は、なんか一子が助けを求めてきた。

<隼人>
「どうかしたか？　百代に下着でも盗まれたか。」

<一子>
「そうじゃなくて、明日までの宿題が分からないのよ〜。」

涙目になって、訴えてくる。
まぁ、一子に泣きつかれる事は、一度や二度じゃない。

<隼人>
「まぁ、いいだろう。ほら、持って来い。」

<一子>
「は〜い。」

<隼人>
「たくっ。という訳だ。百代、出ろ。」

百代は耳を塞いでいる。

<隼人>
「全く、お前も少しは、勉強しろよ。」

<百代>
「隼人。私は、大変な事に気づいてしまった。」

<隼人>
「なんだ？　聞くだけ聞いてやる。」

<百代>
「私たちにも宿題がある。」

<隼人>
「だな。」

<百代>
「なぜ、驚かない！」

<隼人>
「いや、終わってるし。」

<百代>

「隼人～。」

＜隼人＞

「断る。自分で努力しない奴に見せる価値はない。」

＜百代＞

「頼むよ～」

こうして、夜は更けていく。

ゴールデンウィーク

ただいま、俺達、風間ファミリーは箱根に向けて旅行中。

その理由は

＜モロ＞

「全く、毎度毎度、キャップは何かしら引き当てるよね。」

＜岳斗＞

「今度から、福引キングとでも呼ぶか。」

キャップが、福引で当てた。

その本人は、

＜キャップ＞

「お宝ｚｚｚＺ」

夢の中。

移動の電車の中なのだが、

岳斗・モロ・大和・京チーム

＜岳斗＞

「ああ、モモ先輩。俺様におこぼれくれないかな？」

＜モロ＞

「それは無いね。」

＜大和＞
「姉さんに限ってそれはないな。」
＜京＞
「ちなみに、岳斗。それダウト。」
クリス・由紀江チーム
＜クリス＞
「で、まゆっち。箱根の名物はなんなのだ？」
＜まゆっち＞
「なんでしょうか？　私も箱根には行った事がないので。」
キャップ・一子・ユキチーム。
「「「ｚｚｚＺ」」」
百代は、単独で女子大生をナンパに行った。
ちなみに、俺は、
＜隼人＞
「おい、大和。この状況、俺はどうしたらいいと思う？」
＜大和＞
「どうしたらいいだろう？」
ただいま、ユキが俺のひざの上に座って寝ている。
＜隼人＞
「というか、なんでユキは、いつも俺のひざで寝るんだ？」

＜モロ＞
「ユキは、先輩に懐いてるからね。」
＜岳斗＞
「座り心地なら俺様だってなかなかだと思うぞ。」
＜京＞
「岳斗は、硬そう。」
＜大和＞
「寮に入る時だって、兄さんと住むって愚図ったしね。」
そう考えると、まだいい方なのか？
＜モロ＞
「でも、先輩に懐いてるのは、ワン子もだよね。」
＜京＞
「先輩は、二人に何をしたんだか。クックック。」
京が、悪い笑みを浮かべている。
＜隼人＞
「京。」
笑って見せてやる。
＜京＞
「は、はい！」
＜大和・モロ・岳斗＞

「「「！？」」」

とりあえず、黙ったか。

＜モロ＞
「ねぇ、今、どこかで見た事あるような」

＜岳斗＞
「ないような」

＜大和＞
「あっ、ウチの両親だ。」

「「それだ！」」

＜隼人＞
「おい。起きろ、お前ら。」

ここからはバスに乗換えだ。

＜キャップ＞
「なんだ、俺はまだ寝たり無いぞ。」

<ユキ>
「隼人〜。おぶって。」

<隼人>
「キャップはじゃあな。ユキは・・・・まぁいいか。」

ユキをおぶって、キャップを放置。
まぁ、大和がなんとかするだろう。

えっ？　一子？
一子は、

<一子>
「クリ。旅館まで、勝負よ！」

<クリス>
「ふん。望むところだ！」

走って行っちゃったよ。

<岳斗>
「ほら、起きろ。キャップ。」

<京>
「山が待ってるよ。」

<キャップ>
「なに！　山が俺を待ってるぜ〜！」

こっちも復活した。

<まゆっち>
「こういう場合はどうしたら。」

<隼人>
「迷ってるんだったら、こっちに乗れ。まゆっち。」

眼帯さん

＜キャップ＞
「よっしゃー！　釣りだー！」

キャップが、走って釣りに行く。

昨日は、全員旅館で自由に過ごしてた。

＜岳斗＞
「はんっ。俺様の方がでかいのを釣ってやる。いつもキャップに負けてられるかよ」

＜モロ＞
「元気なのはいいけど、釣竿壊さないでよ。」

＜大和＞
「じゃあ、皆で勝負でもするか。もちろん、大きさと数で。」

男どもは、さっそく釣り始めたか。

＜クリス＞
「おお。日本では、免許がいらないのか。」

＜まゆっち＞
「いえ、必要なのところもあるんですが、ここは観光地なので。」

新人二人も楽しんでるようだ。

＜百代＞
「それじゃあ、稽古するか。」

＜一子＞
「はい！　お姉様。」

＜百代＞
「京は、接近戦の稽古な。」

＜京＞
「謝々」

こっちはこっちで、稽古を始めたか。

＜隼人＞
「お前も、たまには、混ざったらどうだ、ユキ？」

＜ユキ＞
「マシュマロ～」

ユキは、胡坐かいてる俺の背中に寄りかかってる。

＜クリス＞
「お、おい。餌がないぞ。」

＜キャップ＞
「そんなモン、現地調達だぁー。よっしゃー！　まずは、一匹目！」

＜モロ＞
「うわっ、もう釣ってる。野生児だね、もう。」

＜大和＞
「しかも、結構でかいぞ。」
＜岳斗＞
「くそぉ～。サカナよ～。来～い。俺様の所に来～い。」
なんで、岳斗はあんなに必死なんだ？
目の前では、釣り。後ろでは、武術。
なんだこのカオス。
一子と京は、森の中に入っていった。
＜隼人＞
「京は、どんどん強くなっていくな。なっ、大和。」
＜大和＞
「兄さん。俺は、京が強くなる度に安眠が遠のくんだが。」
＜隼人＞
「まぁ、京が遠距離タイプの弓使いで良かったな。近距離タイプだったら大変だったな。」
＜大和＞
「やめてくれよ、兄さん。」
＜百代＞
「そう言っても、”蜘蛛の巣”とか京に教えない辺りが大和への優しさのなんだろ？　隼人。」

百代がこっちに来ていた。

＜ユキ＞
「そういうモモ先輩は、京を鍛えるんだよね～」

ユキも会話に参加する。

＜百代＞
「私は、恋する乙女の味方だからな。」

＜大和＞
「でも、自分の事はままならないのでした。」

そう言った瞬間、大和は逃げ出した。

＜百代＞
「その負けん気は買うが、」

百代の雰囲気が変わった。

＜百代＞
「今、お前は言ってはならない事を言った。三十秒待ってやる。」

＜隼人＞
「百代。」

百代に目線を向ける。
百代も頷いてくる。分かったようだ。
まぁ、その瞬間に大和を追いかけてったけど。

<まゆっち>
「あの、隼人先輩は、釣らないんですか？」
まゆっちが声をかけてくれる。
<隼人>
「いや、大丈夫だ。もう別のが、釣れたから。」
<まゆっち>
「へっ？」
<隼人>
「んじゃ、こっちはよろしく。まゆっち。」
<まゆっち>
「あ、あのっ」
<隼人>
「行くぞ、ユキ。」
<ユキ>
「行く行く～」
とりあえず、ユキを連れて森に入る。

<ユキ>
「う～ん。もう一人は、だ～れだ？」

<隼人>
「さぁな。」

一子と京、あともう一人。

<ユキ>
「う～ん。結構強い人なのね～　あっ、モモ先輩も遊んでるみたい～　うりゅ～」

<隼人>
「さすがだな、ユキ。」

ユキは、ウチのファミリーの中で目立たない方だ。
だが、百代を除く女性陣の中では恐らく、二番目に強い。
俺の勘が正しければだが。
特に、危機管理能力が高く、気配察知に関しては俺や百代にも肩を並べるかもしれない。
格闘センスは、まだ底が見えない。伸び盛りだ。
学力もトップクラスだし。

<ユキ>
「あ、いたよ〜」

そこには、一子と京と闘う軍服の眼帯さんがいた。

<一子>
「くっ、この！」

<京>
「ちっ、モモ先輩程じゃないけど、強い！」

<眼帯さん>
「子ウサギが、私を倒せるなどと思わないことです。」

<一子・京>
「「あっ！」」

しかも、きついのが入る瞬間だ。

<隼人>
「はい、そこまで。」

そんな事させないけど。

<一子・京・眼帯さん>
「お兄様！」「隼人先輩！」「なっ！」

<隼人>
「よっ」

驚いた顔をする二人に手を振ってみせる。

＜眼帯さん＞
「なんですか、あなたは？　答えなさい。」

＜隼人＞
「まぁ、そいつらの仲間だよ。後、悪いけど、俺達旅行中だからさ。怪我させられないから、終わりな。」

＜眼帯さん＞
「はっ、誰が、あなたの言う事を聞くと思っているのですか！」

やる気満々みたいだね。でも、

＜隼人＞
「悪いけど、もう終わってるんだよ。」

もう絡め捕らせてもらった。

＜眼帯さん＞
「くっ、この！」

うわっ、この人、興奮してる。だめだ。

＜隼人＞
「仕方ない。一回、頭冷やしてやる。」

＜眼帯さん＞
「はっ！」

糸を解いた瞬間に、殴りかかってきやがった。
でも、

＜隼人＞
「んじゃ、終わり。」

高速で眼帯さんに接近。
前から、首の裏と顎の当りを支えて軽く捻ってやる。

＜隼人＞
「いっちょ上がり。」

気絶した眼帯さんを抱きかかえてやる。

＜百代＞
「なんだ終わったか。」

百代も合流したようだ。

＜隼人＞
「ああ。おわっ」

振り返ろうとしたが、振り返れない。
だって、なんかすごいプレッシャーが。

＜百代＞
「なぁ、隼人。」

＜隼人＞
「なんだ？」

<百代>
「今の状況は、なんだ？」

今の状況？
気絶してる眼帯さんを前から抱きかかえている。
何も知らない人が見たら、かんちが・・・・・・・

<隼人>
「百代さん。」

<百代>
「なんだ？」

<隼人>
「弁明の機会は？」

<百代>
「ない。」

さらば、人生

眼帯さん（後書き）

訳あってというか、作者の考えから辰輝の名前を変えました。
あしからず。

父様

＜百代＞
「で、とりあえず、こいつは誰だ？」

地獄からの生還。
ただの空気がとてもうまく感じる。

＜一子＞
「知らないわ。京と組み手をしてたら、いきなり襲ってきたのよ。」

＜京＞
「しかも、モモ先輩達ほどでないにしろ、かなり強いときました。」

＜ユキ＞
「ツンツン」

＜隼人＞
「ユキ。やめなさい。」

でも、軍服着てるんだよね。

＜隼人＞
「百代。そっちは、どうだったんだ？」

＜百代＞
「数ばかりで退屈だった。」

＜隼人＞

「俺達の中で、軍人と関係のありそうな奴は・・・・・・・」

＜一子・京＞

「「あっ！」」

一人しかいないか。

とりあえず、眼帯さんを担いで他のメンバーと合流に向かう。

すると、

＜男＞

「うむ。では、楽しめているようで、良かったぞ、クリス。」

＜クリス＞

「はい。父様。」

なんか、いかにもお偉いっぽい軍人さんがいるんだけど。

＜まゆっち＞

「あ、みなさん。」
まゆっちが真っ先に気づいたようだ。
<隼人>
「こっちは、なんともないようだな。まゆっち。」
<まゆっち>
「はい。ところで、その人は？」
<隼人>
「ああ、この人はっ」
<クリス>
「マルさん！」
<男>
「マルギッテ少尉！」
なんか軍人親子が、過剰反応してるよ。
<男>
「貴様！　少尉に何をした！」
しかも、銃を構えだした。部下も含めてね。
人生でこんなに大量の銃口を向けられる奴が何人いるだろう。
<隼人>
「ちょっと、興奮して話を聞かないものでね。軽く寝かしつけただけですよ。外傷はありません。」

<男>
「そうか。少尉は、少々闘いに固執する傾向があるからね。」
いや、あれは少々では・・・・・・・・
ウチにもバトルマニアがいるけどさ。

<隼人>
「まぁ、とにかく、起こしてやるか。」

一度、そのマルギッテとかいう眼帯さんを下ろしてやる。
そして、

<隼人>
「起きなさい。」コキッ

<眼帯さん>
「くっ。私は・・・・・・・・」

おっ、状況確認してる。さすが、軍人。

<隼人>
「お目覚めの気分はどうかな?」

目が合った。
<眼帯さん>
「・・・・・・・・・・・・・・」

<隼人>
「どうした?」

＜眼帯さん＞
「なっ」
＜隼人＞
「な？」
＜眼帯さん＞
「なあああああああああああああああ」
なんか叫んで、凄い後ずさった。
＜京＞
「またなんだ、これ。」
＜大和＞
「兄さん。相変わらずだ。」
＜モロ＞
「うん。先輩にかかれば、皆こうなるんだろうね。」
こら、京と大和、それにモロ。
お前ら、なに分かった顔してやがる。
＜岳斗＞
「なんで、いつも先輩なんだぁああああああああ。
俺様、めっちゃ好みなのにいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい」
岳斗うるさい。

<まゆっち>
「なんか、隼人先輩と一緒にいるようになってから、よく見ますよね。この光景。」

<一子>
「まぁ、お兄様は無意識だから。」

まゆっちと一子もなに達観してる！

<百代>
「これは、またお仕置きが」

<ユキ>
「隼人・・・・・・・」

あの、百代さんとユキさんは怖いから。

<男>
「大丈夫か！　少尉。」

<眼帯さん>
「中将殿。ええ、大丈夫です。」

その割に顔がかなり赤いんだけど。

<眼帯さん>
「あなた。名乗りなさい。」

俺を指差して言ってきた。

<隼人>
「人の名前を問う時は、自分からと言うのは日本だけの常識なのかな。」

軽い嫌味。

<眼帯さん>
「そうですね。私は、マルギッテ・エーベルバッハです。覚えなさい。」

<隼人>
「マルギッテね。俺は、伊達隼人だ。」

<マルギッテ>
「伊達隼人？　では、あなたが・・・・・」

<男>
「どうした？　少尉。」

<マルギッテ>
「中将殿、彼が盾です。」

<男>
「ほう。君が・・・・・・・・・」

あの、人をほっといて、品定めみたいに見ないでほしいんだが。

<男>
「そうか。では、私も名乗っておこう。フランク・フリードリヒだ。

よろしく頼むよ。」

＜隼人＞

「ええ。よろしくお願いします。」

まぁ、とりあえず、一件落着？

つかの間の休息

―ｓｉｄｅ　大和―

あの後、なんか凄い顔で、クリスを頼むとか言ってフランクさんは帰っていった。
その後は、とりあえず皆で釣りして、今は温泉に入ってる。

男湯・・・・

＜キャップ＞
「うっはぁー　こんな風呂、毎日入りてぇなぁ～」

＜モロ＞
「あれ？　以外にキャップ、温泉好き？」

＜キャップ＞
「いや、眺めいいじゃん。風呂は対して気にしてないけど。この景色はいいねぇ。」

＜岳斗＞
「はっ。見よ！　この肉体美！」

岳斗が、ポーズをとる。

＜モロ＞
「うわっ。やめてよ、岳斗のグロイんだから！」

＜キャップ＞

「何気にしてんだ？　別に男同士なんだから気にしなくていいだろ。」

＜モロ＞
「キャップと岳斗は、堂々としすぎだよ。」

モロのツッコミは、平常運転だな。

＜岳斗＞
「まぁ、俺様の息子は、例えるならバズーカだな。」

＜大和＞
「されど未だに実践射撃はなく、訓練のみ。」

＜岳斗＞
「そうなんだよ。砲身は磨いてるのに。磨きすぎで擦り切れそうだ。」

俺とモロは、軽くひく。キャップは分かってない。まぁ、性に目覚めてないし。

＜岳斗＞
「そう言うお前の愚息は何なんだよ？」

＜大和＞
「俺のは、マグナムだな。重い一撃をズドンっと。」

＜岳斗＞
「キャップは、マシンガンってとこか？　連射性がありそうだ。」

＜大和＞
「確かにな。」

＜岳斗＞
「モロは、水鉄砲、ホルスター付きっと。」

＜モロ＞
「うるさいな！　僕だって、好きでこうなった訳じゃないよ！」

岳斗も気にしてるんだから、言わないでやればいいのに。

＜キャップ＞
「何、それってもしかして。」

＜大和＞
「キャップ。オブラートに。」

＜キャップ＞
「剥けてないのか？」

＜モロ＞
「うわあああああああああああああああ」

＜大和＞
「直球に言ってどうする！」

＜キャップ＞
「ええ！　ちゃんと包んで言ったろう？」

＜岳斗＞

「言葉に殺しが入ってる。」

モロ、軽く泣きそうだよ。

＜大和＞
「後は、一番気になる奴だ。」

＜岳斗＞
「そこは、同意。」

＜モロ＞
「うん。」

岳斗の言葉に、頷く俺とモロ。

＜隼人＞
「お前ら、少し静かにしろよ。外まで聞こえるぞ。」

来た！

―side out―

―ｓｉｄｅ　隼人―

＜隼人＞
「おい。どうした？」

＜大和＞
「いや、兄さんの息子は、どんな物かと。」

＜岳斗＞
「というか、立派だな。」

＜大和＞
「岳斗の表し方を借りれば、ＲＰＧってとこか？」

＜モロ＞
「うん。それには、僕も納得。」

＜岳斗＞
「俺様で、対抗できるか？」

＜大和＞
「う～ん。何とかできるんじゃないかな。」

＜モロ＞
「それにしても、女湯は静かだね。」

＜隼人＞
「お前らが騒ぎすぎなんだよ。」

＜岳斗＞

「意外と聞き耳たてたりしてな。」

＜隼人＞
「バカが。そんな露骨な奴は、お前ぐらいだ。」

－ｓｉｄｅ　ｏｕｔ－

－ｓｉｄｅ　女湯－

＜京＞
「だがしかし、私は露骨だったのだ。」

＜百代＞
「しかし、これは、凄い会話ですな、京殿。」

＜京＞
「ええ。百代どの。ところで、マグナムって、どんな銃？」

＜百代＞
「大口径なら熊も殺せる、立派な銃だ。」

<京>
「さすがだね、大和。」

<百代>
「弟のくせにそんな危険なモノを隠し持っていたか。」

<京>
「ところで、ＲＰＧって・・・・・・」

<百代>
「しかも、岳斗の自信が揺らぐものか。」

<京>
「あれだけ、いつも威張ってるのにね。」

<百代>
「・・・・・・・・・・・・」

<京>
「モモ先輩。」

<百代>
「なんだ？」

<京>
「心構えだけは、しとかないとね。」

<百代>
「そうだな。」

<百代・京>
「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」

<一子>
「あっ！　ユキがのぼせた！」

<百代>
「なにっ！　早く引き上げろ！」

―side out―

―side 隼人―

<隼人>
「なんだ？　いきなり騒ぎ出したな。」

<大和>
「どうせ、姉さんがまゆっちやクリス辺りを襲いだしたとかでしょ。」

<隼人>
「そうだな。」

いい湯だ。

川神院の掟

ゴールデンウィークも終わる直前の夜。
旅行からも帰ってきて寝ていたが、
爺とルー先生に呼び出された。

＜百代＞
「おっ、来たか。」

＜隼人＞
「百代もか。という事は、あれね。」

俺と百代、爺にルー先生。
この四人が集まるという事は、話題にあがるのは一つ。

総師範に総師範代。その候補筆頭に総師範の孫。
この顔が揃う時に話す話題は、大抵、川神院の今後。
ちなみに、総師範代候補筆頭とは、俺のことね。
俺に、そのつもりは無いが、師範代の人達が推してくるんだよね。

＜隼人＞
「このタイミングで呼ばれるという事は、一子の事か。」

＜爺＞
「そうじゃ。」

＜ルー＞
「そうだネ。そろそろ、結論を出さなきゃいけないだろうネ。」

百代の言葉に、爺とルー先生が答える。

この話題が話されるのは、今回が初めてじゃない。

爺とルー先生は、一子に武の才能がないという事で違う事をさせた方がいいと思っているのだが、
一子が努力する姿を見て、今まで結論を延ばしているのだ。

＜百代＞
「爺の考えは、変わらないのか。」

＜爺＞
「そうじゃな。一子の努力は、確かに認める。
が、川神院の強さの質を落とさぬためにも、川神院の掟に従おうと思う。
これは、川神院の総師範としての意見じゃ。」

＜ルー＞
「そうですネ。私も一子の努力には報いたイ。
ですが、このままでは、師範代にする事はできませン。」

爺とルー先生は、難しそうな顔をしながら言う。

＜百代＞
「一子・・・・・・・・」

百代も確かに一子の努力は認めている。だから、なんとか師範代にしてやりたい。
だが、総師範候補として、妹を甘やかすことができない。
その二つの意見が交差して、頭を悩ませているのだろう。

そして、一子の川神院の役に立ちたいという理由を笑顔で話す様子が頭をよぎって、
師範代にできないのが悔しいのだろう。

＜爺＞
「モモも意見は、同じのようじゃな。」

首は振らない。
俯いて黙っている。

＜爺＞
「一子にはかわいそうな話じゃが、師範代になる人間とは、根本的に違うからのう。」

＜ルー＞
「そうですネ。師範代の試験すら、今の実力では受けるには値しませんからネ。」

＜百代＞
「だがっ！」

ルー先生の言葉に百代は食い下がろうとするが、うまく言い返せない。
否定する言葉が見つからないのだろう。

そのまま、3人とも沈黙する。

＜爺＞
「所で、隼人よ。お主から見てはどう思う。」

爺が、さっきから一言も喋らない俺の意見を求める。

＜ルー＞
「総師範代候補筆頭の意見も聞かなきゃイケナイネ。」

＜隼人＞
「・・・・・・・・・・・」

3人の視線が俺に集中する。

＜隼人＞
「確かに、今の実力では、試験を受けるに値しないだろう。」

＜ルー＞
「やはり」

＜百代＞
「・・・・・・」

＜爺＞
「それでは、このk「だがっ」」

ルー先生の言葉を遮る。

＜隼人＞
「まだ成長の余地がある。」

＜爺＞
「それはそうじゃろうが。」

<隼人>
「だから、俺が、一子を夏休み終わりまでには、鍛えあげよう。」

<爺>
「それで、師範代にふさわしい実力が身に付くと？」

<隼人>
「ああ。一子は、自分の本当のスタイルを見付けてないだろうし、そのための技を持っていないだけだろう。」

<百代>
「スピードを生かす事が、一子のスタイルではないというのか？」

<隼人>
「違う。俺と百代のタイプで派閥を分けると、川神院のほとんどは百代のタイプだ。
だが、一子は、おそらく俺と似たタイプだろう。」

<百代>
「お前のような技を身に付けるというのか。」

<隼人>
「違う。攻撃主体か、防御主体かという事だ。」

もちろん、百代が攻撃で俺が防御。

<隼人>
「だから、夏休みに師範代の試験を行う。そこで、結果を出そう。」

<百代・爺・ルー>
「「「・・・・・・・」」」
3人は俺の言葉に黙ってしまった。
<爺>
「分かった。夏休みが明ける前に一子の師範代試験を行う。」
<隼人>
「頼むな、爺。」
爺の言葉に、少し安堵した。
これで、少なくとも俺が力になってやれる。
<爺>
「ほっほっほ。しかし、お主にそこまで言ってもらうとは。
一子に期待してしまうの。」
<隼人>
「期待してやがれ。」
<ルー>
「その才を見る目。君には、更に川神院の総師範代になってもらいたくなってきたネ。」
<隼人>
「それは言わないでください。」
総師範代なんて、正直興味ないんだよ、俺は。

それにちゃんと生かしてやらないと、見極めたことにはならない。

＜隼人＞
「それでは、この事は俺から一子に伝えときます。」

＜爺＞
「ほっほっほ。それでは、今日は休みなさい。」

＜隼人＞
「じゃあな。」

俺と百代は、部屋に向かった。

＜隼人＞
「なぁ、なんで黙ってんだ？」

＜百代＞
「いや、お前の方が、一子をよく見ていると思ってな。

私なんか、一子を待ってるしか考えなかったのに。
姉失格だな。」

何黙ってるかと思えば、

＜隼人＞
「阿呆。」

＜百代＞
「な、なんだと！」

こいつは昔からバカだ。

＜隼人＞
「お前は、アイツの目標であり続ければいいんだよ。
アイツを励ましてやるの、兄の俺の仕事だ。」

＜百代＞
「だが！」

＜隼人＞
「黙れ。
姉のお前が目標で、兄の俺が励ましてやる。俺達の妹を支えてやるには、それで十分だろうが。
他の事は、いやでもファミリー連中がカバーしてくる。」

＜百代＞
「そう、だな。」

＜隼人＞

「お前が落ち込んでどうする。」

＜百代＞
「いや、私の周りにはできた奴が多いと思ってな。」

＜隼人＞
「じゃあ、百代が辛い時は、いつもみたいに泣きついてきていいぞ。」

＜百代＞
「なら、隼人は私に泣きついていいぞ。」

「馬鹿が。俺にそんなのいらねえよ。んじゃな。」

後ろの百代に手を振って、部屋に入る。

―ｓｉｄｅ　ｏｕｔ―

―ｓｉｄｅ　百代―

隼人は、部屋に入っていった。

なにが、いらないだ。

強がりを言いおって・・・・・・

昔から隼人は、ファミリーの兄的ポジションにいる。
皆をフォローして、ファミリーがいつも笑っているように。

アイツは、ファミリーを守る城のようなヤツだ。

いつもは開けっ広げだが、いざという時は無敵の城塞と化す。

アイツが私達を包んでいるから、今のファミリーがあると私は思っていた。

だが、そんなアイツをフォローできる奴は誰なのだろうか。

それが、最近悩みだった。

できれば・・・・・・・

―side out―

Unknow

ーｓｉｄｅ　悠獅ー

久々の自分の家。
そのせいなのか、いつもよりも多く寝てしまった。

＜悠獅＞
「にしても、眠い。」

でも、いつまでもこうしてる訳にもいかないんだよね。

＜悠獅＞
「とりあえず、おきっ」

あれ、右腕が全く動かない。
そして、なにやら柔らかい感触を感じる。

＜悠獅＞
「またか。」

布団をめくると、辰子が右腕に抱きついて寝ていた。
まぁ、初めてではないし、というか家で寝ると大抵こうだし。

＜悠獅＞
「起きようね、辰子。」

＜辰子＞
「ｚｚＺ」

駄目だ。完璧に寝入ってる。
体を揺さぶっても、どうせ起きないだろうし。

＜悠獅＞
「仕方ないか。そりゃ！」

わき腹に踵を落とす。

＜辰子＞
「おふっ。な、なに？」

＜悠獅＞
「辰子。俺の手を離してくれ。」

＜辰子＞
「はい。」

辰子は、素直でいい子なんだよね～
代わりってわけでも無いんだけど、頭を撫でてやる。

＜辰子＞
「えへへ。」

嬉しそうに笑ってるし。
和むな～

＜悠獅＞
「んじゃ、俺行くから。」

＜辰子＞
「うん。お兄ちゃん、またね～」
辰子に見送られて家を出た。
さて、俺の根城に行きますか。
＜竜兵＞
「兄貴。出かけるのか？」
と、思ったら竜兵が戻って来た。
＜悠獅＞
「おう。元気にしてろよ～」
そのまま、手を振って別れたけど。

＜悠獅＞
「にしても、ここは相変わらず治安が悪いよね～」
少し良く見れば、そこら辺一帯血痕とかすぐ見つかるし。
夜になれば、流血沙汰なんか見ない日があるのかな～ってレベル。

＜男＞
「おい、ガキ。」
こういう風に絡んできたりする奴もしょっちゅうだ。

＜男＞
「聞いてんのか、おい。」

＜悠獅＞
「すいません。少し考えてたもので。」
相手は、体格の良い男。あきらかにパワータイプ。

＜男＞
「でだ。テメェ、少し付き合え。ちょうど、イライラしててな。」
ボコりたいのね。

＜亜巳＞
「おい、豚。」
あれれ～。なんで居るのかな。仕事じゃなかったっけ。

＜男＞
「誰が豚だ、この野郎！」

＜亜巳＞
「黙れ、豚。」

男が振り返ったと思ったら、横に倒れた。
そして、表れたのは、

＜亜巳＞
「たくっ、私の弟に手ぇ出してじゃないよ。」

＜悠獅＞
「亜巳姉。ありがと。」

いや、一瞬だったよ。
さすがだね。

＜亜巳＞
「気をつけなよ。悠獅は、絡まれ易いんだから。」

＜悠獅＞
「分かった。それじゃあ、俺行くから。」

亜巳姉は、強いなぁ～

俺の根城は、親不孝通りにあるビルだ。
そこは、目の前の通りを人が通るのだが、あまり目立たなく人に関心を持たれるような建物でもないため、根城としては最適だと俺を思ってる。
俺に用がある人以外は入ってこないし。
ま、俺に会いに来る奴なんて、たかが知れてるけど。

＜悠獅＞
「これはこれは。」

だから、見知らぬ男が立ってるなんて珍しい。

＜？？？＞
「柳瀬悠獅さんですね。すこし、お話が。」

これは、楽しくなるかもしれない。

一子、修行開始。百代、裏方。

―ｓｉｄｅ　一子―

＜隼人＞
「ほら、反応が悪い。自分がどの部分を使ってるかを理解しろ。」

＜一子＞
「はい！」

今日は、いつものランニングをせずに、朝から軽い組み手をしていた。
私が、朝から組み手をする事はたまにあったのだけど、相手がお兄様なのは初めてだった。
しかも、私を強くするためにしばらく付きっきりで修行をしてくれる。

＜隼人＞
「ほら、まただ。理屈で考えるな。お前に理屈なんて求めてない。」

だったら、私はやるしかないわ！

＜一子＞
「もう一本！」

―ｓｉｄｅ　ｏｕｔ―

ーｓｉｄｅ　隼人ー

＜隼人＞
「じゃあ、朝はここまでな。自主練は構わないが、俺の指導の支障になるような事はやめろよ。」

爺達との話し合いからは、二日が経過。
さすがに、まだ成果は出せない。当たり前だが。
それでも、自分の判断に間違いは無いと確信している。

＜一子＞
「はい！　ありがとうございました。」

一子の人生を俺が握っていると考えると鬱だな。

＜隼人＞
「んじゃ、飯食って学校だ。それと、忘れるなよ。」

＜一子＞
「はい！」

俺が、一子に言ったことは一つ。
常に体のどこの部分をどのように使っているかを意識し、無駄な力を使わない。
今のとこ、これだけ。
でも、これができれば動きは明らかに変わる。

＜隼人＞
「俺も飯に行くか。」
まぁ、先は長いがね。
＜百代＞
「ご苦労さま。」
う、うん？
目の前には、百代が水を差し出している。
とりあえず、百代の額に額をあわせ、
＜隼人＞
「熱はない。」
＜百代＞
「熱なんかあるか！。お前は、私をなんだと思っている！」
顔を真っ赤にして言ってくる。
いや、だって、
＜隼人＞
「お前、今までそんな事した事ないだろ。どうした？」
むしろ、それは俺の役だった。
＜百代＞
「いや、お前にワン子を任せきりなんだ。なら、少しでもお前のサ

ポートをしないといけないと思ってな。」

まぁ、言ってる事はわかるが、なぜにモジモジしながら上目づかいで言う。

＜百代＞

「だからだな。これからは、私がお前のサポートをしてやるからな。」

＜隼人＞

「分かったが、顔を真っ赤にして言う事か？」

＜百代＞

「うるさい！」

あ～あ、行っちゃった。

まぁ、サポートしてくれるならありがたい。

お言葉に甘えましょう。

－ｓｉｄｅ　ｏｕｔ－

－ｓｉｄｅ　大和－

＜大和＞

「で、どうしろと？」

＜百代＞
「いいから何も言わずに食べろ。そして、感想を言え。」

状況を整理しよう。
朝、登校中、ファミリーと合流。
うん。そこまではいい。
そして、兄さんとユキがいつもの如くじゃれ合い始める。
そしたら、姉さんが詰め寄って来て、差し出してきた。唐揚げを・・・・

＜大和＞
「とりあえず、食べればいい？」

＜百代＞
「さっさと食べろ。」

おそるおそる口に運ぶ。

＜大和＞
「えっ！」

＜百代＞
「ど、どうした？」

＜大和＞
「普通に凄くうまい・・・・・」

＜百代＞

「・・・・・・・・・・・・・・」

＜大和＞
「姉さんて料理得意だった？」

＜百代＞
「別にそういう訳でもないが。」

というか、今の姉さん。
好きな人に食べさせる女子の反応みたいなんでけど。

＜百代＞
「まぁ、とにかくありがとな。うまいならいいんだ。」

＜大和＞
「ああ、うん。」

まさかな。

－ｓｉｄｅ　ｏｕｔ－

－ｓｉｄｅ　隼人－

今は、昼休み。という訳で、まずは、腹ごしらえ。
弁当は鞄のなｋ

＜隼人＞
「・・・・・・・・おい、百代。」

＜百代＞
「な、なんだ？」

＜隼人＞
「食ったな？」

＜百代＞
「なんのこｔ」

＜隼人＞
「食ったな？」

とびきりの笑顔でくれてやる。

＜百代＞
「はい。食べました。」

ったく。

＜隼人＞
「仕方ない。買って来るか。」

席を立ち上がろうと、

＜隼人＞
「なんだ？」

百代が服を掴んで立てない。

＜百代＞
「その、なんだ。」

なんか、モジモジしてるんだが。

＜女子＞
「ねぇ。なんか今日の百代さん、いつもと違うね。」

＜女子＞
「うん。なんか女の子みたい。」

ほら、周りも言ってる。というか、百代は女だろ。

＜百代＞
「弁当は、私のをやる。だから、食うといい。」

＜隼人＞
「あ、ああ。ありがとう。」

”ボンッ”

ん？　なんだ？　なんか顔真っ赤で湯気ふいてっけど。

＜百代＞
「食べたら、机に置いといてくれ」

”ドドドドドドドドドドドド”

＜隼人＞
「うわ、速。」

おもいっきり走ってった。

＜隼人＞
「まぁいいや。んじゃ、いただきます。」

弁当をあけると、いつもの川神院の弁当じゃないのに気づいた。

＜隼人＞
「そういう事ね。」

”サポート”してくれるのね。

＜隼人＞
「にしても、うまいなぁ。」

いつの間に、こんなにうまくなったんだか。
前作った時は、酷かったのに。

一子進化（ちょっぴり）

ーｓｉｄｅ　隼人ー

＜隼人＞
「はい、ここまで。大分、まともになってきたな。」

＜一子＞
「えへへ、そうかなぁ～。」

＜隼人＞
「でも、調子に乗れる程じゃないな。」

＜一子＞
「あうっ。」

今日も一子に稽古をつけている。
正直、体の使い方は今までの比じゃない。

ま、だからもの凄く強いのかって言ったらそうでもないけど。

＜隼人＞
「じゃあ、次だ。もう一段上げるぞ。」

＜一子＞
「はい！」

うん。元気良いのは良い事だ。

そして、登校中

＜男＞
「私は、雲野十蔵。川神百代殿、又は伊達隼人殿のどちらかと決闘して頂きたい。」

お、久々の挑戦者か。

＜男＞
「そして、できれば私の弟子とも相手を願いたい。」

弟子付きか。ちょうどいいぐらいの強さの奴だな。

＜隼人＞
「一子。お前が弟子の方の相手をしろ。」

＜一子＞
「はい！」

<クリス>
「待ってください、隼人先輩。ここは自分が。」
一子に戦わせようとしたら、クリスが志願してきた。
<一子>
「ちょっとクリ！　私が闘うのよ！」
<クリス>
「いいじゃないか。自分もたくさんの武人と手合わせしてみたい。」
しかも、クリスに反応して一子も騒ぎ出した。
<隼人>
「はぁ～。いいから一子。闘って来い。」
<一子>
「わ～い。行ってくるわ～。」
<クリス>
「む。隼人先輩。」
クリスがむくれている。
<隼人>
「クリス。忘れてるかもしれないが、これは一応、川神院の正式な決闘なんだよ。
それを川神院の門下生でもない奴にさせられる訳がないだろう。」

＜岳斗＞
「あれ？　でも、俺様、前に北海道から来た兄弟ぶちのめしたぞ。」
岳斗は、前に嫁探しに来て百代を嫁にしようとした兄弟と闘った事がある。

＜隼人＞
「あれは決闘でもないだろう。なんで、礼儀のない奴にこちらが礼を尽くさなきゃならん。
それに、客観的に見れば百代が男を振ったって話だろう。」
だって、相手も決闘じゃないって言ってたし。

＜京＞
「つまり、礼を尽くしてきた相手に礼を返さないのはだめって事。
クリス、いい子だから我慢我慢。」

＜クリス＞
「こら、京。子供扱いするな！」

＜モロ＞
「というか、皆、ワン子の闘いを見なよ、そろそろ。」
モロの言葉で、全員が闘いを見るに徹する。
そして、始まった。

＜京・クリス・まゆっち＞
「「「えっ？」」」

声に出したのは3人だが、恐らく俺と百代以外を驚いているだろう。
そして、皆が驚いた理由は、
＜京＞
「は、速い。」
＜クリス＞
「しかも、キレが今までの比じゃない。」
＜まゆっち＞
「それだけじゃない。全くの無駄がありません。」
ほう。人目見ただけで、そこまでまゆっちは分かるか。
＜百代＞
「今までのワン子の動きとは全然違うな。これもお前のお陰というヤツか、隼人？」
＜隼人＞
「まだ序の口だ。元々の鍛錬がなきゃ短時間でここまで来ない。」
＜百代＞
「努力の天才ってヤツか。」
＜隼人＞
「そういう事。でも、まだまだ。」
＜百代＞
「ああ。師範代には届かない。」

速いだけじゃ駄目だからな。

＜隼人＞
「ま、これから、少しずつ闘い方も教えていくさ。」

＜ユキ＞
「あ、終わっちゃった～。ワン子強～い。アハハハハ。」
まぁ、あれぐらいなら余裕でしょ。

＜隼人＞
「んじゃ、もう一人の相手をしてやりますかね。」

＜大和＞
「えっ！　兄さんが出るの？」

＜隼人＞
「なんだ、可笑しいか？」

＜大和＞
「可笑しくはないけど。」

＜ユキ＞
「隼人が可笑しいんだよ～。いつもは出ないくせに～。モモ先輩に食べられちゃえ～。」
ユキが肩に乗っかりながら、髪を弄くってくる。

＜隼人＞

「たまにはやるさ。んじゃ、行ってくる。」

対戦相手に向かっていく。

＜隼人＞
「じゃあ、始めましょうか。」

＜男＞
「よろしくお願いする。」

＜隼人＞
「では、どうぞ。」

俺は、構えない。

端から見れば、無防備だが今からやる事はただ一つ。

＜男＞
「せやぁああ」

突っ込んでくる相手の足を払い、そこから下がってくる顎を、

＜隼人＞
「はい。」

踵で蹴りぬく。

＜男＞
「うがっ」

もちろん、顎を蹴りぬかれた相手は倒れる。

＜隼人＞
「こんな感じで、相手の力を利用してやれ。分かったか、一子。」

＜一子＞
「はい！」

一子は、言うよりやった方が吸収早いからな。
いや、いいとこに対戦者が来たよ。

にしても、見事に決まった。
相手の足を払って、スピードせいで体勢を直せない相手の落ちてきた顎を蹴る。

見事に決まった。

＜隼人＞
「んじゃ、学校行くか。そろそろ、時間だろ。」

このまま、順調にいけばいいな。

猟犬、S加入

―side　隼人―

＜隼人＞
「平和だ。」

一子の修行も今の所順調。
これといった事件もなく、百代の暴走もない。

＜隼人＞
「平和、だ？」

平和だと思ってたんだが、なんか嫌なことが起こったみたいだ。

＜百代＞
「おい！　隼人！」

＜隼人＞
「分かったから。そんな嬉しそうな顔をしてこっちに来るな。」

＜百代＞
「とりあえず、遊んできていいか？」

＜隼人＞
「駄目に決まってるだろう。下手したら、世界大戦勃発だぞ。」

このバトルマニアが。

＜ユキ＞
「隼人～。囲まれってっるっよ～。」
ユキも気づいて俺の所に来た。
＜隼人＞
「それは分かったが。俺の肩に乗るな。」
＜ユキ＞
「それは無理～。」
なんでユキは、いつも肩に乗るんだ？
まぁいいけど。
＜メイド＞
「モモ先輩に伊達先輩か。あんたら、授業はいいのか？」
じゃれてると、メイド服を着た女がいた。
＜隼人＞
「俺は、成績に困ったことはないからな。」
＜百代＞
「私には、隼人という切り札が」
＜隼人＞
「自分で勉強しろ。」
百代はいつも俺に泣きつくからな。

＜メイド＞
「所で、これはあのバカ軍人だろ？　なんでまた、あいつが来てるんだよ。」

＜隼人＞
「さぁな。猟犬でも来るんじゃないかな？」

＜メイド＞
「また面倒なのが。あたしは、英雄様に危害を加える奴が増えると面倒なんだよ。」

この女（名前は忍足あずみ）は、川神学園に通っている九鬼財閥の御曹司・九鬼英雄のメイド兼護衛だから、厄介な奴が面倒なんだろう。

＜隼人＞
「じゃあ、俺は戻る。ユキも教室に戻れ。」

＜ユキ＞
「は～い。」

―ｓｉｄｅ　ｏｕｔ―

―ｓｉｄｅ　大和―

＜クリス＞
「という訳で、恐らく2年Ｓ組転入生は、マルさんだろう。」

＜一子＞
「マルさん？」

クリスの言葉にワン子が首を傾げる。

＜大和＞
「マルさんって、この前の眼帯の軍人さん？」

＜一子＞
「ああ！　マルチーズね！」

＜クリス＞
「おい、犬。人の名前はしっかり覚えろ。礼儀だぞ。」

＜一子＞
「名前、なんだったかしら？」

＜大和＞
「確か、マルギッテさんだったかな。」

クリスの親父さんが、そう呼んでたはずだけど。

＜クリス＞

「ああ。マルギッテ・エーベルバッハという。自分の姉みたいな者だ。」

＜岳斗＞
「それにしても、あの眼帯さんが転校生か。いいね。俺様のタイプだからな。」

＜モロ＞
「まぁ、僕らには関係ない事かな。接点なさそうだし。」

岳斗とモロも興味はあるみたいだ。モロは、あんまりだけど。

＜大和＞
「京はどう思う？」

さっきから、本読んでる京に話を振ってみる。

＜京＞
「S組に入るって事は厄介だよね。あっちの戦力増える訳だし。大和好き。」

＜大和＞
「確かになぁ。ただでさえ、優秀な奴らの集まりだからな。お友達で。」

＜キャップ＞
「そうなると、確かに厄介な奴が増える事になるな。だが、その方が燃えるだろう。よし！面白くなってきた！」

キャップは、逆境の方が燃える性質だからな。

<モロ>
「というか、ナチュナルに告白と返事が入ったね。いつもの事だけど。」

<京>
「新しい女が入ってきたので、すかさずアプローチ。」

<モロ>
「親指立てながら言わなくていいから。」

モロのツッコミは、早いね。いつも思うけど。

<一子>
「あれ？　ユキは？」

<岳斗>
「さっき教室出てったぞ。どうせ、隼人先輩の所だろ。」

ユキも相変わらずだった。

―side　out―

―side　マルギッテ―

＜マルギッテ＞
「今日からこのクラスで学ぶことになりました。マルギッテ・エーベルバッハです。覚えなさい。」

中将からの勅命で、お嬢様の護衛に当たる事になった。

＜宇佐美＞
「よし。じゃあ、お前ら仲良くやるんだぞ。おじさんの手を煩わせるんじゃないぞ。」

＜マルギッテ＞
「了解。」

返事をして、席に着く。

＜冬馬＞
「マルギッテさん。私は、葵冬馬です。よろしく。それと、」

＜準＞
「井上隼だ。気軽にやってこうぜ。」

いかにもな優男とハゲが話しかけてきた。

＜冬馬＞
「良ければ、後で一緒にお茶でもいかがですか？」

＜マルギッテ＞
「結構です。」

＜準＞

「若は、手が早いから気を付けろよ。」

ハゲが忠告してくるが、

＜マルギッテ＞
「関係ありません。私にそのような話題は不要です。」

「あ、そう。」

＜あずみ＞
「おい。どけ、ハゲ。」

ハゲが視界から消えてメイドが出てきた。

＜あずみ＞
「英雄様のお話ですよ～☆」

＜英雄＞
「フハハハハハ、マルギッテよ。我は、九鬼英雄。英雄になる男だ。この背を目に焼き付けるがいい。」

＜あずみ＞
「パチパチパチ～。さすがは、英雄様～。」

＜マルギッテ＞
「マルギッテ・エーベルバッハです。覚えなさい。」

＜あずみ＞
「あなたなんですか。英雄様に向かってその口調は？」

＜英雄＞
「出過ぎるな、あずみ！その様な小さき事にいちいち構うでないわ！」

＜あずみ＞
「申し訳ありません。英雄様。」グキッ

メイドの女が、肩を外した。

＜英雄＞
「あずみよ。貴様はなんという忠義者よ。」

＜あずみ＞
「ありがたきお言葉です。英雄様～。」

なんだ、この茶番は。

猟犬、S加入（後書き）

「此方は～」

隼人の繋がり

―ｓｉｄｅ　隼人―

＜隼人＞
「はい。どちら様ですか？」

電話と共にそれはやってきた。

＜男＞
「私だ。」

聞こえたのは男の声。
しかも、あまり聞きたくない声。

＜男＞
「来年だな。それまでに、覚悟を決めとくんだな。」

＜隼人＞
「いきなりで、しかも随分とはっきりモノを言いますね。」

＜男＞
「お前ももう子供ではないからな。それに賢いお前の事だ。もう遠まわしに言い合うのも疲れた。」

＜隼人＞
「そうですか。もう年なんじゃないですか？」

＜男＞

「ああ。最近、自覚する事が多いよ。後継者が不在でな。」

＜隼人＞
「相変わらず、皮肉が好きですね。」

＜男＞
「そう聞こえたか？　事実を事実として言ったまでだが。」

白々しい奴だ。

＜男＞
「まぁ、じっくりと覚悟を決めろ。それと霧夜と本多の御令嬢が会いたがってたぞ。
特に、霧夜の方は結構焦れていたからな。気をつける事だ。」

＜隼人＞
「忠告ありがとう。叔父さん。」

ちっ、死ね。

電話が切れると溜め息が出てきた。
昔からだが、あの人は嫌いだ。

＜百代＞
「叔父さんか？」

隣にいた百代に聞いてきた。

そういえば、隣にいたのを忘れていた。

＜隼人＞
「ああ。」

＜百代＞
「相変わらずのようだな。」

＜隼人＞
「みたいだ。それにしても、よく分かったな。」

＜百代＞
「お前が、電話越しで今の顔をするのはあの人だけだろう。」
なんか見透かされてるようで腹が立つ。

＜百代＞
「それにしても、あと一年もないか。実力行使って訳にはいかないのか？」

＜隼人＞
「無理だな。そんな事をしたら、姉さんに迷惑かけちまう。」

＜百代＞
「あの人ならそんな事気にしないだろう。」

＜隼人＞
「だろうけど。」

そんな事を言ってたらまた電話がなった。

＜隼人＞

「噂をすればなんとやらってか。」

＜女＞
「何が？」

電話からは聞きなれた女の声が聞こえてきた。
電話の相手は、本多　玲。
俺とは幼い時からの知り合いだ。

＜隼人＞
「こっちの話だ。所でどうしたんだ？」

＜玲＞
「アンタが連絡寄越さないからじゃない。前は、たまにだけど連絡くれたのに。」

＜隼人＞
「忙しかったんだ。」

＜玲＞
「ただの学生のアンタが、私よりも忙しいと？」

＜隼人＞
「いや、さすがに玲よりは、暇だろうけど。」

こいつの実家は、国内では五指に入る財閥なので、同い年で家の手伝いをしているのだ。
それに、こいつの家を武家の血筋だから、身体能力はもちろん、武術もこなす。

<玲>
「そんな私が、夜な夜な愛する人からの電話を待ってたのに電話の一つ寄越さないなんてねぇ。」

<隼人>
「おい。人聞きの悪い事を言うんじゃねぇよ。」

<玲>
「あれ？　そうだっけ？　まぁいいや。」

<隼人>
「お前も相変わらずだな。」

<玲>
「そうなのよ。だから、・・えっ、・・・・もう・・・ごめん。また忙しくなったからまたね。」

そう残して、電話が切れた。

<隼人>
「相変わらずだな。」

<百代>
「ああ、お前もな。」

なんか、百代が不機嫌なんだけど。

<百代>
「お前は、隣に女がいるのにその横で他の女と仲良くしてるよな。いっつも。」

＜隼人＞
「・・・・それが？」

＜百代＞
「私は、それが万死に値すると思うんだが、どう思う？」

＜隼人＞
「知るかっ！」

逃げるが勝ちだ。

＜百代＞
「逃がさん！」

百代が全力で追いかけてくる。
まぁ、スピードは、俺の方が上だから追いつかれることはないと思うんだが。

＜百代＞
「はやとおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

この顔を見たら、悪魔も裸足で逃げ出すって。
なまじ綺麗な顔してる分怖い。

＜百代＞
「お前は、なんでいつもそうやってふらふらと。」

＜隼人＞
「知らねぇっつうの。」

小声で呟いてのだが、

<百代>

「何が、知らないだあああああああ。そのせいで、私がどれだけ。」

もう嫌だ。

この鬼ごっこは、一時間ぐらい続いたとさ。

突然の来訪

―ｓｉｄｅ　隼人―

＜隼人＞
「ん？」

突然に、本当に突然、背中に冷たいものを感じた。
だが、それも一瞬で消えた。

＜百代＞
「どうかしたか？」

珍しく登校中に女子の下に行かなかった百代が声をかけてくる。

＜隼人＞
「いや、何か感じたんだが。お前は、何か感じなかったか？」

＜百代＞
「私は、何も感じなかったぞ。」

百代が気付かないなら気のせいか？

＜ユキ＞
「ボク、感じたよ～」

＜隼人・百代＞
「「なに！」」

百代や俺が気付くか気付かないかのものを感じただと。

＜一子＞
「え？　何々？　どうかしたの？」

一子にも一応聞いてみるか。

＜一子＞
「ううん。私は、何も感じなかったわ。」

＜百代＞
「一子も気付かない。ユキだけが感じれたか。なんだろうな？」

＜隼人＞
「まぁ、分からないものを気にしても仕方ないだろう。」

クリスや京と喋っているまゆっちじゃ、気付いてないだろうし。

＜岳斗＞
「お！　校門の前に年上っぽい美女が！」

岳斗の声に一同がそっちを見る。

＜一子＞
「ホントだ。」

＜キャップ＞
「なんだなんだ？　面白うそうな匂いがするぞ！　また、クリスの知り合いか？」

＜クリス＞
「いや、自分の知り合いではないぞ。」

＜モロ＞
「というか、明らかに日本人だしね。」

＜京＞
「大和、知ってる？」

＜大和＞
「いや、俺も知らない。」

＜岳斗＞
「んな事どうでもいいんだよ！　お、ねえさ～ん！」

岳斗が特攻して行った。

「というか隼人。あれ、あの人じゃないか？」

それは、さっきから思ってたよ。

＜隼人＞
「たぶんな。」

なんで、校門の前なんかにいるんだよ。あの人は。

＜岳斗＞
「隼人先輩！　どういう事だよ！」

＜隼人＞

「暑苦しい。」

いつの間にか戻ってきた岳斗に胸倉を掴まれた。
蹴り飛ばしといたけど。

＜隼人＞
「はいはい。ご指名なのね。」

久しぶりの再開といきますか。

＜隼人＞
「こんにちは。」

＜女＞
「また、見ないうちに逞しくなったわね。」

俺の顔を見て、笑顔で返してくれる。

＜隼人＞

「ええ。久しぶりです。」

＜女＞
「何年ぶりかしらね。」

＜隼人＞
「最後に会ったのが、中学に入る前ですからね。６年は経ってると思いますし、俺が家を出てからは今年で１０年ぐらいじゃないですか。」

＜女＞
「ホント、長かったわ。」

＜隼人＞
「それには、同意しますよ。」

本当にいろんな意味で長かった。

＜女＞
「ところでさ。」

＜隼人＞
「はい？」

＜女＞
「なんで敬語なの？」

なんでそんなに笑顔で言うのかな、この人は。

＜隼人＞

「いや、久しぶりに会うんで、つい。」

＜女＞
「電話で話したりしたのに。」

＜隼人＞
「まぁ。」

＜女＞
「昔から、礼儀正しい子だったからねぇ。ヤトくんは。」

＜隼人＞
「そんな事ないですよ。」

ちなみに、ヤトって言うのは、昔のあだ名だ。

＜女＞
「そんな事あるよ。私がいくらヤトくんを出汁に小言を言われたと思ってるのよ。」

そんな事はないんだけどなぁ。必死に真似してただけだし。

＜女＞
「とにかく、今更私に敬語は無し！　いい？」

＜隼人＞
「分かったよ。薫姉さん。」

＜薫＞
「うん。よろしい。」

伊達薫。俺の従姉妹で、姉貴分。ある意味、俺が一番世話になった人でもある。
この人には、昔から適わないんだよね。

＜隼人＞
「こっちには、何をしに？」

＜薫＞
「大学も卒業したからね。留学先から帰ってきたんだけど。そしたら、こっちに行ってこっちで住めってね。」

＜隼人＞
「な！　それを叔父さんが？」

＜薫＞
「そういう事なんだけどね。まぁ、私の事は、近所のお姉さんみたいに思ってくれればいいよ。
そういう訳で、よろしくね。」

笑顔で言ってくるが、その笑顔で確信した。

これが、俗に言う波乱の幕開けというヤツですか？

波乱

－ｓｉｄｅ　隼人－

姉さんと再会した日の夜。

＜隼人＞
「姉さん。」

＜薫＞
「なぁに？」

＜隼人＞
「近所のお姉さんにとでも思えって言ったよね。」

＜薫＞
「うん。」

＜隼人・薫＞
「「・・・・・・・・・・・・・・・」」

＜隼人＞
「近所どころか部屋一つ挟んだだけじゃないか！」

＜薫＞
「ね、近所でしょ。」

＜隼人＞
「近所すぎてどうすればいいか悩んでしまうよ。」

なんで、川神院に住む事になってんだよ。

＜隼人＞
「爺は知ってんのか？」

＜薫＞
「ええ、もう一ヶ月も前に許可を頂いてるわ。」

なんでそれが俺に伝わってないんだよ。

＜薫＞
「ちなみに、鉄心さんは面白そうだからあなた達には言わないって。
」

＜隼人＞
「爺、死ね！」

あんのスケベ爺が。
さっさとくたばれ！

＜一子＞
「ねぇねぇ。お兄様。」

＜隼人＞
「ん？」

＜一子＞
「私、この人の事、お兄様の知り合いって事知らないんだけど。
どんな人なの？」

そういえば、百代は会った事があったけど、一子はなかったな。

＜隼人＞
「俺の実家、つまり伊達家の方の知り合いだから無理もないな。
というか、百代！　人の枕に顔を埋めるな！　匂いでも嗅いでんのか！」

＜百代＞
「いいだろ、減るもんじゃないんだから。お前の枕は、いい匂いがするんだよ。」

＜隼人＞
「黙れ枕を離せ。」

俺からいい匂いがする訳がないだろうが。

＜一子＞
「お兄様、今日は荒れてるわ。」

＜薫＞
「仕方ないわよ。私だって、いきなりヤト君と一緒に生活するように言われたらこうなるわ。」

薫姉さんは、一子を膝に座らせて頭を撫でてる。

＜隼人＞
「ほのぼのしすぎだって、そっちは。」

というか、それを理解してるんだったら俺に一報入れてくれ。

<隼人>
「もういいか。で、薫姉さんの事だったな。」
百代は諦めて、一子に説明を始める。
<隼人>
「薫姉さんは、俺の従姉妹だよ。」
<一子>
「お兄様に従姉妹なんていたんだ。」
<隼人>
「従姉妹だけだったら、同世代だけでも後6人はいる。」
<一子>
「へぇ～。意外だわ～。」
<薫>
「ヤト君の場合、顔を会わせてない人もいるけどねぇ。」
<隼人>
「家を出たのが8歳だからな。それに、俺と仲良くしてくれたの薫姉さんぐらいだし。」
<薫>
「皆、あなたに対抗意識全開だったから仕方ないわ。」
<百代>
「ほう。隼人は、その頃から優秀だったのか。」

枕の匂いを嗅いでた百代も話に参加。

＜薫＞
「まぁね。天才姉弟って言われていた程だったから。」

＜隼人＞
「別に俺は、天才じゃない。」

これは本当だ。

＜薫＞
「ヤト君はいつもそれね。まぁ、あれだけ周りから”劣化コピー”って言われればね。」

＜百代・一子＞
「「”劣化コピー”？」」

＜薫＞
「あれ？」

＜隼人＞
「姉さん！　その話はいいから。」

＜薫＞
「言ってなかったのね。ごめんね、今の無し。」

正直、あの時の事は今でも思い出したくない。

＜薫＞

「まぁ、とにかく、ウチの家は、とにかく競争が激しくてね。
それで、ヤト君は優秀だったから、年上に煙たがられたのよ。」

＜百代＞
「競争が激しいとは言っても幼い子供だぞ？」

＜薫＞
「その子供が、一番頭首に相応しいって言われてたからね。」

＜百代・一子＞
「「頭首？」」

＜薫＞
「そ、一族の一番偉い人。」

＜一子＞
「そんな感じの家って、御三家以外にもあるのね。」

＜百代＞
「東北筆頭とはいえ、そんな制度がまだ生きていたのか。」

＜薫＞
「ウチは、皆プライド高いからね。奥州筆頭伊達正宗の子孫ってだけで。」

＜一子＞
「伊達正宗の子孫！」

＜薫・百代・隼人＞
「え？」「ん？」「お？」

一子の一言に全員で反応。

＜一子＞
「伊達政宗って、伊達政宗？」

＜隼人＞
「たぶんな。」

＜一子＞
「教科書に載ってる？」

＜隼人＞
「ああ。」

＜一子＞
「あのどくがんりょう？」

＜隼人＞
「独眼竜だ。」

独眼竜ぐらい言えないでどうするんだ。これからは、勉強も教えてやらんと。

＜百代＞
「そういえば、ファミリーには言ってないな。私も気にしてなかったし。」

＜隼人＞
「そういえば、忘れてたな。」

<薫>
「そう言う事は、しっかり言っときなさい。後々、面倒よ。」
はい、反省。
<隼人>
「ウチのファミリーは、そういうとこに無頓着だからな。」
<百代>
「で、薫さん。話の続きだ。」
混乱してる一子を放置して、百代が促す。
<薫>
「とまぁ、隼人は、年下の癖にって嫌われてたのよ。」
<百代>
「だったら、その座を力で奪えばいいものを。」
<薫>
「それは無理よ。」
<百代>
「どうして？」
そう力づくで解決したら、何も問題は起きない。
だけど、
<薫>

「頭首になるために、前提条件を満たしてる必要があるの。
それを満たしていなければ、どんなに優秀でも偉くてもなれないわ。
」

＜百代＞
「それを、隼人は満たしていたと。」

＜薫＞
「そう言う事。他には二人だけ。でも、両方女だからって却下されたわ。」

＜百代＞
「じゃあ、ただ一人の適合者だったのか。」

＜隼人＞
「そう言う事だ。」

まぁ、仕方ない事だと思えばそれまでの事なんだけどね。

＜百代＞
「所で、条件とはなんだ？」

＜薫＞
「それを言ってなかったわね。伊達家頭首の条件、それはね。」

＜百代＞
「それは？」

＜薫＞
「眼の開眼よ。」

<百代>
「眼の開眼？」

<薫>
「そう。」

<百代>
「・・・・・・・・・・・・・・・」

百代は沈黙。というか、一子が湯気吹き出してるんだが、まぁいいか。

<百代>
「眼の開眼とは？」

<薫>
「伊達家の特殊能力とでも言えばいいかしらね。百代ちゃんの瞬間回復みたいなモノよ。
効果はもちろん違うけど。」

<百代>
「どんな効果なんだ？」

<薫>
「効果は言えないわ。でも、名前だけ教えてあげる。」

あ、名前だけで不満そうだ。

<薫>

「種類は二つ。名前は、竜の眼と蛇の眼。」

＜百代＞
「・・・・竜の眼・・・・・・蛇の眼・・・・・・・」

＜薫＞
「ま、聞いたことはないと思うわ。」

＜百代＞
「確かに聞いたことがない。」

＜薫＞
「伊達家の強みだからね。まぁ、この二つのどちらかを持ってないと頭首にはなれないの。」

＜百代＞
「それを、隼人は持ってると。」

＜薫＞
「ま、そう言うこと。」

面倒なんだよね、この眼。
効果の割りに反動が大きいし。

＜百代＞
「所で、聞いていなかったが、なんで薫さんはここに来たんだ？」

＜薫＞
「許婚だから。」

＜百代＞
「へぇ〜、そうなのか。」

＜薫＞
「ええ。そうなの。」

＜百代＞
「・・・・・・・・・・・・・・・・・」

＜薫＞
「・・・・・・・・・・・・・・・・・」

＜隼人＞
「・・・・・・・・・・・・・・・・・」

＜百代＞
「許婚えええええええええええええええええええええええええええ！？」

ほら、波乱だ。

波乱（後書き）

セリフが分かり難いと意見があったので、少し形式を変えました。

接触

ーｓｉｄｅ　悠獅ー

＜悠獅＞
「皆で飯食うって言ったのに、我が妹は何処に行ったんだ？」

俺は、赤く染まった空のした変態の橋近くの川原を歩いていた。
ウチでは飢えた獣（弟と妹）が待っているのだが、もう片方が戻ってこないのだ。

＜悠獅＞
「たくっ。今日は、どこで昼寝してるのかねぇ～」

そう思いながら、先日の輩を思い出していた。

そう、俺の根城に居た奴だ。

～回想～

＜？？？＞
「柳瀬悠獅さんですね？」

＜悠獅＞
「・・・・・・・・・・・・」

目の前にいたのは、とてつもなく不気味な奴。
特に仮面を付けたり、格好が変だったりするのではなく。

＜???＞
「ほう。随分と勘が働くようだ。」
そう。ただ単純な動物的な勘。
そして、
＜???＞
「しかも、私のような者を求めていると。これはこれは、御しがたい人だ。」
目の前にいるの異端。ただ一つとして、まともなトコが一つもない、その集合体。
＜???＞
「ふむ。かなりの見識も持ち合わせているようだ。これは、僥倖。あなたのような者に会いたかった。これ以上ない程に適役だ。」
＜悠獅＞
「あなたの名前は？」
＜???＞
「私の名か。さて、どうしたものか。」
そいつは、考えていたがふと思いついたように言う。
＜???＞
「では、あなたが好きな名を付けるといい。
ちなみに言っておくが、君が名を教えるに値しないという訳ではない。
私にとって、名など幾千ある内のただ一つの名称に過ぎない。

ならば、あなたとの出会いに喜びを表し、その相手であるあなたに名を付けていただくというのも一興というだけの事。」

＜悠獅＞
「俺との出会いに喜びを、か」

＜？？？＞
「その通り。獣は、カール・クラフト。花は、カリオストロ。我が同胞は、メルクリウス。
他にも多くの名を付けられたよ。故に、名というモノに愛着が持てない。なので、あなたに名を付けてほしい。それが、私だというように。」

＜悠獅＞
「まぁ、それはいずれ勝手につけさせてもらうよ。
で、なにか用なのかな？」

＜？？？＞
「いやいや。今日の所は、特には。また、近い内に会いに着ますよ。」

＜悠獅＞
「そうか。じゃあ、さっさと帰ってくれ。こっちも色々とやる事があるんでな。」

＜？？？＞
「ならば、この辺で。でも、一つだけ言っておきましょう。
開演は、近いでしょう。」

そう言った瞬間に、そいつは歪んで霧のように消えた。

＜悠獅＞
「開演？」

～回想終了～

とてつもなく胡散臭い奴。信用には置けないタイプだ。
そして、なにより、敵にするも味方にするも厄介なタイプ。
敵にすれば単純な脅威。味方にすれば内部破壊の異分子。

＜悠獅＞
「なんにせよ。面倒なのに眼をつけらちゃったな。」

そう嘆いた瞬間、草の上で寝ている辰子を見つけた。

＜悠獅＞
「辰子。」

＜辰子＞
「あ、お兄ちゃん。」

満面の笑みで応えてくれる。
全く、なんであの家に居てこんなにいい子に育つんだか。

＜悠獅＞
「帰るぞ。って、誰だそれ。」

隣には、銀髪の男が寝ていた。

＜辰子＞
「さぁ？　でも、かわいいよねぇ～。絶対、弟だよ～。」
＜悠獅＞
「なんで、そんなのが分かるんだ？」
＜辰子＞
「こう、外面からは、感じとれない弟オーラが出てるんだよ。」
辰子のこれはよく分からんが、高性能らしい。
＜悠獅＞
「まぁいいか。とりあえず、帰るぞ。竜兵と天が待ってる。」
＜辰子＞
「うん。えへへへ～」
返事と同時に俺の右腕に抱きついてきた。
腕を組みながら歩いていると、向かいから何人かの集団がきた。
＜男１＞
「兄さん！　いたぞ。」
＜女＞
「あ、ホント！　お兄様～。お姉さまが～。」
＜男２＞
「隼人先輩！　モモ先輩を止めてくれ～。」
＜男３＞

「このままじゃあ～。」

なにやら騒がしいが俺の知ったことじゃない。

にしても、

＜悠獅＞

「開演、か。」

その言葉だけが気がかりだった。

友人～不穏な影～

－ｓｉｄｅ　隼人－

川原で昼寝中、一本の電話が来た。

＜隼人＞
「珍しいところから、電話が来たな。」

電話の相手は、俺のよく知る男だった。

＜隼人＞
「お前が俺に電話するとは珍しいな。」

＜男＞
「うるせぇ。こっちに事情があるんだよ。」

クールで不機嫌そうな声が聞こえてきた。
まぁ、こいつの場合、いつも不機嫌そうな上に口もあんまり良くないからな。

＜隼人＞
「で、どうしたんだ？
お前から電話するなんてなんかあるんだろう？」

＜男＞
「なきゃ電話なんてしねぇよ。」

電話の男は、武田信司。

俺の昔から友人だ。まぁ、顔を合わせたのなんて数える程だけど。
それでも、何かと気が合った。

＜信司＞
「お前、最近、他の武家と連絡とったか？」

＜隼人＞
「他の武家と？
玲とは連絡とったけど。」

実家を出てからそういうのはあんまりしてないし。
それでも連絡を寄越すの玲と信司と数人しかいない。

＜信司＞
「あいつは、どうでもいいんだよ。
お前の敵には絶対ならねぇから。
他は？」

他？
そんな奴は……

＜隼人＞
「あ、天花は相変わらずって聞いたぞ。」

＜信司＞
「あいつも、コントロールできる様な奴じゃないからいいんだよ！
他だ。織田とか雑賀とか」

＜隼人＞
「織田とか雑賀とかって、西の方の奴か？

俺、あっちの奴とそんなに仲良くしてないぞ。天花は別だけど。」
織田の高慢野朗とか雑賀の女好きとか面倒だし。
ちなみ、天花とは、俺と玲と信司、共通の友人だ。
なんか凄いふわふわしてる。性格じゃなくて行動が。
キャップなんかと気が合いそう。

＜信司＞
「ちっ。お前に聞いた俺が馬鹿だったか。」

＜隼人＞
「散々な言いようだな。また、のしてやろうか？」

＜信司＞
「いいねぇ。やってみろよ。
いつまでも俺が負けると思ってんじゃねぇだろうなぁ？」

＜隼人＞
「そう言って、お前はいつも負ける。」

＜信司＞
「るせぇ！　パワーじゃ負けねぇ分、正面きっての殴り合いになったらどっちに分があるか理解してるんだろうな！」

＜隼人＞
「だったら、正面きってなんてやらないね。」

＜信司＞
「てめぇもいつもそれだ。」

さっきからかなり馬鹿にしてるけど、信司もなかなか侮れない。
本人の言うようにパワーは、俺よりも上。それどころか、百代よりも上だろう。
つまり、俺の知り合いであいつにパワーで勝てる奴はいない。
本気でやりあったら、百代と同レベル。
瞬間回復がある分、百代の方が強いだろうけど。

というか、いつも百代は強い奴探してるけど、
俺の知り合い、というか友人は大抵百代クラスで戦える。
俺からすれば四天王なんてお飾り。
四天王と同クラス、それ以上に戦える奴なんて俺の知り合いだけで十人近くはいる。

＜隼人＞
「とりあえず、話を戻すけど。
連絡がどうかしたのか？」

＜信司＞
「まぁな。お前、幸人は知ってるよな。」

＜隼人＞
「幸人？　真田の坊ちゃんか？」

女顔でよく姉たちに女装させられてるイメージが浮かんでくる。
お坊ちゃんって感じだけど、さっき言った四天王クラスの知り合いの一人。

＜信司＞
「坊ちゃん扱いはやめてやれ。凹み易い奴だから。」

＜隼人＞
「で、その幸人がどうした？」

＜信司＞
「最近、様子が変だからよ。いろいろと調べたりしてみた訳だ。」

＜隼人＞
「そしたら、それに織田と雑賀も絡んでた、と」

あの女顔が織田と雑賀と仲良くできると思わないんだけどなぁ。
いや、幸人がおおらかだからか。

＜信司＞
「そこまでは言わん。ただ、白か黒か言ったら、かぎりなく黒に近い灰色ってとこだ。」

＜隼人＞
「灰色は当てにならないぞ。灰色なんて、そこら辺にいくらでもあるんだから。」

＜信司＞
「まぁ、とにかく。その他に何人か絡んでるみたいでな。
お前は、なにか知らないかとね。」

そういう訳ね。
でも、俺には何も話がきてないからなんとも言えないな。

＜隼人＞
「というか、そういう事は、玲に聞けばいいんじゃないか？

後、西の事なら、天花とか。」

＜信司＞
「玲には聞いた。天花は旅だと。」

玲が知らないとなると俺が知ってる確率は格段に落ちる。
天花は、まぁ、いつもどおり。

＜隼人＞
「西絡みで、他に聞けるような奴……いや、真田が混じってる時点で西ではないか。」

＜信司＞
「それに西には西で、西方十勇士とかできたらしいからな。西でまとまってる訳じゃないだろう。」

＜隼人＞
「西方十勇士？　なんだそりゃ？」

＜信司＞
「なんでも、日本の中心は西で俺たちはその代表だって奴の集まりみたいなものか。
石田の坊ちゃんと島のおっさんが中心なんだと」

＜隼人＞
「年下をおっさん言ってやるなよ。
まぁ、あいつらぐらいなら、なんとでもなるからいいか。」

＜信司＞
「とりあえず、そういう訳だからなんか分かったら教えろ。

じゃな。」

そういって、電話は一方的に切られた。

<隼人>
「いきなり切るなよな。」

にしても、最近、嫌な感じがそこらじゅうからするんだよな。

<隼人>
「これは、一波乱あるかな」

一子の修行もさっさとケリつけなきゃならんかね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6645v/

真剣で私と踊りなさい！～光陰の二人～

2011年12月14日00時47分発行